

作東の文化

発刊40周年記念号 No. 40

作東文化協会

平成26年10月吉日

作東地域内 世帯主各位

作東文化協会
会長 内藤善晴

「作東の文化」誌のお届けについて

稔りの秋を迎え、皆様にはご繁忙の中お過ごしのことと拝察します。

平素より作東文化協会の活動にご協力・ご支援を賜り、お礼申し上げます。

さて、作東文化協会では、文筆部門発表の場として昭和50年から「作東の文化」誌を発刊しており、今年で発刊40周年記念号を発刊することができました。

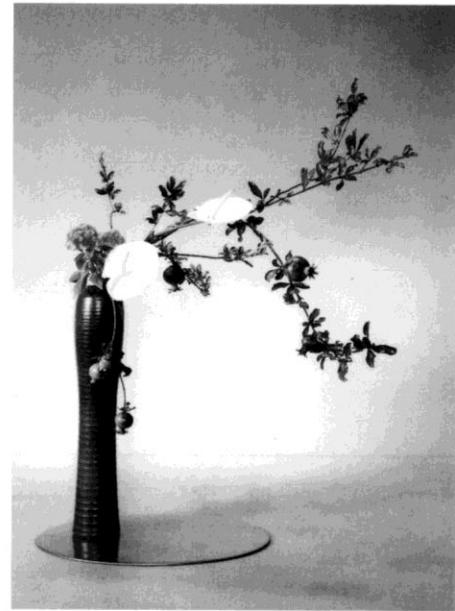
そこで、作東文化協会の活動内容等を広く認識いただき、文化協会の活性化を図りたく、作東地域内全戸にお届けします。

ご一読いただき、協会に対するご意見等を賜れば幸甚に思います。

今後とも作東文化協会にご支援を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

作東の文化

No.40



生花 中田敏甫

平成26年10月15日

目次

巻頭言

「作東の文化（発刊四十周年記念号）」発刊にあたって

内藤善晴……………1

特別寄稿

作東の文化……………萩原誠司……………3

読書と私……………大川泰栄……………4

四十周年特別寄稿

八月に想う……………あさのあつこ……………6

父の涙……………岡田千茶……………8

美作市の遺産を守り、伝承すること

安藤由貴子……………9

作東中学校三年A組 N藤学級の思い出

植野喜美枝……………11

ふるさとの風景……………長瀬加代子……………12

ことわざのように……………里見明……………13

文化活動は私の生き甲斐……………横山猛……………15

文化誌に恋して……………谷口重人……………16

作東文化協会沿革史

所感寸言

午年……………井上健一……………30

住めば都……………衣笠早巳……………31

老いのたわ言……………吉政実夫……………32

随筆随想

爺さん(グランパー)の独り言……………安東公一……………35

老いを元気に……………原嘉洋……………36

思い出……………長家……………38

この道……………岩本全子……………39

三匹の子猫……………井口祥子……………40

朝起きし散歩する……………加藤美雪……………41

歴史紀行

春日大明神へ後醍醐帝行幸……………原利保……………44

江見の八十五年の歴史と共に……………野村勝志……………46

「武蔵」ゆかり事績・府県間の交流連帯の完成いま喫緊

加藤芳英・春名倫子・安東奈穂子……………48

短文芸

俳句

うつろひ……………春名はるを……………53

風やさし……………杉本幸子……………53

四季折々……………山本靖子……………54

四季……………真野雅子……………54

里山を思う……………青山美和子……………54

冬帽子……………高橋やえ子……………54

燕くる……………福嶋多斐子……………55

紫陽花……………樽井清江……………55

心無に……………沖田はるみ……………55

宝物……………豊田絢子……………56

草取り……………井口祥子……………56

ほたる……………森本久子……………56

パスにて……………下山紀子……………56

亡き母	加藤美雪	57
花吹雪	樽井悦子	57
川柳		
老いて	樽井悦子	58
脱原発	山下照夫	58
野の暮らし	太田智子	59
孫	山本昌子	59
折にふれ	衣笠隼巳	59
夫婦	原洋一	59
短歌		
さくら	井上さかゑ	60
春近し	安東菜穂子	60
雲動きおり	加藤幸子	61
吾が人生	新免初子	61
生きる	松本哲夫	61
独り居	山下光子	61
花一輪	福嶋多斐子	62
農を愉しむ	山下三代子	62
「勝田」周辺の気も清けく	加藤芳英	62
折々に	杉本幸子	63
一人見て居り	森本久子	63
友情	名部みどり	63
栗井の村	安西苑	63
曾孫	光井房子	64
老	藤川亜也	64

折々に	原幸子	64
曾孫	清田三智子	64
春を待つ	大内佐智	65
老ゆる	名部通子	65
老いゆく我か	藤本伸子	65
能登香の湯	内藤慶子	66
過疎の村にて	松井洋子	66
鶯	原順子	66
娘との旅	有元理嘉子	66
墓地の草引き	横山美恵子	67
いまだ途中	新免三子	67
ばかり	小林洋子	67
明けのかなかな	加百由起子	68
新年の朝	新田千晶	68
旅	豊田絢子	68
追悼	黒石初江	68
ごうろ山	末宗玲子	69
体の記憶	丘野道子	69
わが母	船曳文子	69
母の日	加藤保子	69
声ヶ札	角利津子	70
甦りたり	北村和子	70
折りをりに	中川富美枝	70
ウオーキング	角三津ゑ	70
栗倉の郷	森佳奈	71

暮らす	黒石登代	71
ぬくき光	長澤和枝	71
夫と子	福島美智子	72
巢	日下智加枝	72
音が聞こえる	入矢敏江	72
ミルクの香り	浜田くに子	72
山繭	坂井はつ子	73
負けられん	三浦智江子	73
醜	関内智子	73
粟井小学校に寄せて	池田保子	73
グループ紹介		
白雲書道会		75
春・春名		75
阿部書道会		76
作東絵画教室		76
土居すみ絵会		77
彩の会		77
すみれ会		78
こぶしの会		78
盆栽		79
ひまわりの会		79
茶の湯同好会		80
英北短歌会		80
能登香短歌会		81
吉野短歌会		81

山家川俳句会	82
作東川柳同好会	82
歴史地名研究会	83
古文書を読む会	83
写真同好会「写友」	84
琴伝流 大正琴「あずさの会」	84
舞の会	85
作東吟詠愛好会	85
コール作東	86
江見ちぎり絵教室	86
福山ちぎり絵教室	87
がんびの会	87
双山囲碁クラブ	88
お達者ねつと倶楽部	88
編物・手芸教室	89
ピースを楽しむ会	89
作東文化協会会則	90
平成25年度 作東文化協会事業報告	92
平成25年度 作東文化協会決算報告	95
平成26年度 作東文化協会会員・役員名簿	96
編集後記	109

〈資料〉作東地域歴史年表

〔巻頭言〕 「作東の文化」(発刊四十周年記念号)「発刊にあたって

会長 内藤善晴

「作東町文化協会沿革史」によると、文化協会が誕生したのは、昭和四十二年七月である。それから八年後、昭和五十年十一月に「作東の文化(第一号)」が発刊されている。

残念ながら、第九号以前のものにはお目にかかれていないが、その後、投稿された各種文面の中から、その当時の先輩諸氏の情熱やご努力の様子は窺い知ることができる。第十号などには広告のページが随所にあつて、経済面でのご苦勞のほどがよくわかる。

私が文化協会の会員になつたのは、おそらくその頃だつたように思われる。当時、町議をしておられた方から、常会の席で次のようなことがあつたのを覚えていゝ。「ここで作東町文化協会というものができて、なるべく大勢会員になつて欲しいとの要請があつたので、とりあえず今年の分は自分の方でまとめて支払つておいた。できれば来年度からは、会費を集金して欲しい」と頼まれて、何やらすつきりしないものを感じながらも、気軽に引き受けてしまつたのである。

沿革史によると、昭和六十一年四月に、「文化協会会員募集開始(会費五百円)」とあり、昭和六十二年十一月には、「作東の文化(第十三号)」を町内全戸に配布」とある。その第十三号の残部が数冊、私

の書棚から出てきたのである。その翌年には、会則を改正して年会費千円と改め、支部組織を創設して支部長を置き、各部落には評議員を置いて、会員研修旅行も開始された。

それ以来、私は、粟井支部の役員(評議員)を外れたことはない。積極的な活動こそはなかつたのだが、ただ会費を集めて回り、支部の文化展や芸能発表等の事業には真面目に協力、参加してきた。谷口前会長の言われているサポーター会員だったのである。

記録を辿つて繋いでみると、わずか五十四名の会員で発足した作東町文化協会は、平成九年には千名を超えるまでになった。平成十七年には、六町村が合併して美作市が誕生し、美作市文化連盟が発足することになった。それに伴つて「作東町文化協会」は「作東文化協会」として再スタートすることになった。その平成十五年の千五十四名をピークに、平成十七年以降は、人口減少社会を反映したように、千名を切るようになり、少しずつ減少傾向の中での微増減の形で推移している。

大切なことは、会員数の多寡ではなくて、私たち地域住民の生活と文化が、少しでも豊かな内容のものであり得るかどうかが問題であらう。

私は、人間らしく心豊かに生きることを求めて鋭意努力してこられた先輩諸氏に、深甚なる敬意と感謝を捧げたい。それと共に、マンネリズムに陥ることなく、日々新たな感動や思いを大切にしていきたいと思つている。そうして、会員一人ひとりの努力と協力によって、この伝統ある文化協会を守り育てていって欲しいと願つている。

特別寄稿

作東の文化

美作市長 萩原誠司

作東町文化協会ができたのは、昭和四十二年（一九六七）年のことであつたと聞いています。その立役者が、有名な書家の阿部雲魚先生です。阿部先生は、私が岡山市長に当選した直後の平成十一年に、人を介して、熱烈な祝意を送つてくれました。そのとき私は、阿部先生のご出身が旧作東町であることを知り、それゆえの熱烈な祝意であつたことを理解したものでした。そして、いま、私が阿部先生のふるさとの市長として、作東文化協会の四十周年記念誌に拙文を寄せさせていただくめぐり合わせになつたことに、まことに縁の深さを感じます。

阿部先生の思いは、「私は長い年月、日本の各地で生活したために、田舎に帰つたら農村文化に少しでも力を入れたいと思つていた」という、発刊三十周年記念号に阿部先生が寄せられた特別寄稿の文章に端的に表現されています。「農村文化に力を入れたい」ということですが、こ

れには大まかに二つの意味があると思つています。

一つは、「農村を文化的に止揚したい」という宮沢賢治の発想です。つまり、農村に文化の種をまき、根付かせ、そして花を咲かせるという取り組みです。

もう一つは、近年盛んになつた発想ですが、「農村には文化があつたし、現在もある。それを、思い出し、掘り起こし、そして、花を咲かせる」というものです。

阿部先生は、十年前に、農村に文化が根付いたことを喜びとし、作東文化協会の関係者に感謝する趣旨の言葉を残しておられます。まさにその通りだと私も思います。ゴールデンウイークに、バレンタインの丘に、洋画の展覧会がありましたので、拝見に参上しましたが、日本のどの地域にも劣らない力作ぞろいで、心から楽しませていただきました。作東に文化が根付いたことは、明白です。

一方で、私たちの地域が独自に発展させてきた文化と

いうものを、私たちは、十分に思い出し、掘り起こし、そして、花を咲かせる努力をしているのかどうか、この点については、立ち止まって点検する必要があるように思います。

吉野では、宮原の獅子舞の保存と伝承の努力がなされています。また、粟井では農村歌舞伎が地道な努力によつて、なんとか守られています。おそらく、私が十分に知らないだけで、江見にも土居にも、福山にも守るべき文化を守る努力をしておられる方がおられるに違いありません。私たちは、次の十年、「農村にある独自の文化の花を咲かせる運動」をすべきではないでしょうか。

私の立場で申し上げれば、粟井の小学校の活用策とし

て、農村文化の継承発展、さらには、都市部への売り込みを念頭に、同校を文化教育のセンターとし、市内の小中学校が、年に一度は、同校を訪れ、みそ造り、子供歌舞伎、獅子舞の教育を受けることを考え、地域の皆さんと相談しています。草刈も立派な農村文化ですから、ひよっと、科目の中に「手かま」による草刈も入るかもしれません。文化協会の皆様におかれては、できますれば、このような美作市の取り組み方針にもご理解をいただいたうえで、幅広く農村文化をとらえ、その振興に取り組み、楽しんでいただけますよう、心からお願い申し上げます、拙文を終わらせていただきます。

読書と私

美作市教育長 大川泰栄

趣味が読書とは、全く一般的であり、可もなく不可もなく、就職面接の回答に使われそうですが、やはり趣味は何と聞かれると「読書」と、まず回答してしまいます。

なんでもいい、活字があれば満足、子どものころは文字通り食事よりも読書が好きで、大きな声では言えないも

の小学校の授業中でも隙間があれば本を読んでいただけです。

いろいろ考えてみますと、本が好きになった理由は大きく二つありそうです。

一つは、父親による読み聞かせです。幼いころに絵本を

何度も読んでもらった記憶があります。早く本文が聞きたいのに、私の父は、「こども読んでおけば内容が良く分かる」と言い、前書きから最後の後書きまで読んでくれました。意味は分からないながらも繰り返し読み聞かせられるその内容が物語の作者紹介であることも多く、グリム童話とはグリム兄弟が作った物語らしいなど、いわば雑学ともいえる知識も同時に吸収することができて、読書とは知ることなり、経験できない多くのことをあたかも経験できたかのように知ることができると、子ども心に理解できた「読み聞かせ」でした。こうしたことから本を読み、様々な知識を得ていくことが楽しみと喜びとも繋がります、ますます読書に力が入りました。小中学校では、新学期に新しい教科書を渡されると、とりあえず全ての教科書に目を通し、特に国語の教科書ではそれまで読んだことのない物語があると、それを図書館で借りて読むなどした覚えがあります。

もう一つの理由は、本に飢えていたことでしょう。

私が幼いころはまだ本は高価なものであり、簡単に買ってもらえるものではなく、今のように図書館が普及していることもなく、毎年、クリスマスと誕生日を兼ね、買ってもらえる本は本当に貴重でした。(残念なことには?)私

は十二月生まれ、誕生日とクリスマスがほとんど重なっていて、まとめられていました)また、年に一、二回、本屋さんに連れて行ってもらい、本を買ってもらえることは何にも替えがたい楽しみでした。当時、大切にしていた絵本三冊「ニルスの不思議な冒険」「眠り姫」「十二人の王子と白鳥」など、今でも鮮明にその内容と絵を思い出すことができます。残念なことに引越越しを繰り返す中でなくしてしまいました。

そのような中で学校図書館との出会いは宝の山に踏み込んだような喜びでした。この文学全集を読破しよう、偉人伝を片っ端から読もうとか、はたまた片隅に埋もれていた古い自費出版の本に感動して同じ作者の本を探すなど、何度も足を運びました。そのとき、この本はどうだった?次はこんな本もあるよと、さりげなく伝えてくれた人が「学校司書」さんでした。子どもにとって、読んだ本を大人に認めてもらえる、お勧めの本を伝えてもらえるのはこれも大きな喜びでした。

こうした環境の中で読書が何よりの心の癒しになってきました。教員として生徒に接するときもこの経験を生かし、学級の生徒の前に自分が感動した本を読み聞かせをする、道徳の時間の教材として活用するなど読書を題

材に授業をしました。また、「朝読書」のススメについて多くの実績を知る中で、学校全体に朝読書を広げようとしたこともあります。多くを語らなくても実際に効果が上がり、落ち着いた学校生活が始められる状況に接すると、いつの間にか学校全体で取り組むようになったこともあります。こうなると「読書」は趣味であり、仕事に生

かせる題材であり、大切な人生の友にもなっています。

この作東の地においても図書館を利用して多くの子どもたちが本を読む喜びに浸り、本を友とできるようになるの地に読書の文化が今まで以上に普及することを願って拙文を終わります。

四十周年記念特別寄稿

八月に想う

あさの あつこ
(作家・美作市)

この原稿を書いているのは、八月の初旬。
夏真っ盛りの時季である。

夏は濃密な季節だ。大人にとっても若者にとっても子どもたちにとっても。

夏休みがあり、甲子園があり、帰省ラッシュがある。なにより、八月六日があり、八月九日があり、八月十五日がある。戦争と平和について、それぞれの想いを振り返り、噛み締める特別の季節なのだ。

このところ、わが祖国のまったただ中は、なにやらきな臭く、戦争の影を憂う声があちこちで聞こえるようになってきた。私は、むろん戦後生まれで、あの戦争の何をも知らない。沖繩で、広島で、長崎で、東京で、岡山で六十九年前にどんなことがあったのか、生身で知っているわけではない。だからこそ、知らねばならないと思うし、知っている方々にはぜひ、語ってもらいたいと望む。あの戦争をその生身で理解している高齢者の皆さんは、それぞれの想

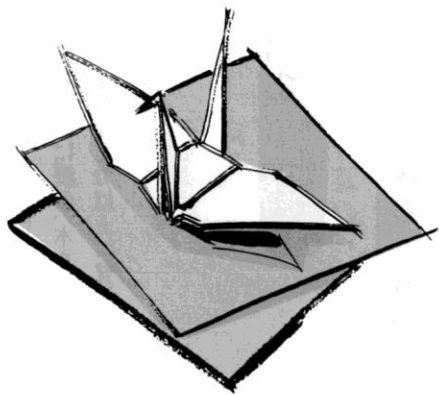
いをこの夏にこそ、若い世代へと語り伝えて欲しい。それは、私たち戦後生まれの者には、できない仕事なのだ。

話がややずれるが、数年前、大学の友人たちと十数年ぶりに集い、おしゃべりをした。よもやま話の後、話題は野放図にあちこちし、「今までで一番、怖かった経験でなに？」というところに、辿りついた。で、ある友人、仮にA子としておくが、彼女は、息子が三歳のときの話をした。

夜中にふっと目をさますと息子のYくんが、上半身を起こしてじっと前を見ているのだ。視線の先には窓があり、窓は当時流行り(?)の出窓になっていた。甘えっ子で、いつもは目を覚ましたとたんぐずぐず泣き通すYくんの尋常でない様子に、A子は怯えながらそっと尋ねた。「どうしたの」。Yくんは、布団に包まっている母を見下ろし答えた。「ママ、知らないおじちゃんが笑ってるよ」と。「あのとさほど怖かったことはないわ。うち、マンションの十八階なのよ。ペランダがついてるわけじゃなし、人が立てるわけじゃないもの」。A子は、今思い出してもぞっとすると身を震わせたのだ。

B江は、新宿の雑踏の中で二年前に亡くなった義姉とそっくりの女生徒とすれ違った話をした。E美もよく似た経験をしたと告白。場は盛り上がりになり上がった。さ

ながら、おばちゃんたちの百物語の様相である。残念ながら、私にはしゃべるべき話題がなく、聞き手に回っていたが、その中で、ずっと黙っていた日香がほそりと、「あたし、戦争が怖い。あたしたちが戦争に巻き込まれたらって考えただけで、寒気がする」と言った。その口調の真剣さに一瞬、誰もが口をつぐんだ。日香の怯えた顔と声を、なぜかこのごろ、よく思い出してしまう。



父の涙

岡田 千茶
(川柳作家・岡山市)

昭和十九年十一月三十日、当時、江見町役場の書記をし

ていた私は、その日、金属供出で集まった蚊帳の吊り手などの金具を、日直に渡す作業が終わって、江見駅前の事務所で一升瓶を据えて慰労会をしていた。そこへ役場の小使いの小母さんから電話で、十二月四日、岡山工兵隊へ入営との教育召集令状が来たことを知らされた。

入隊の前々日、役場での事務引き継ぎが終わった夜、小使いの小母さんの姪で、当時、江見商工会で事務をしていたK子と、江見神社へ参拝した。戦争での無事を祈ったつもりだった。

K子は私と同じ十九歳、阪神方面へ行っていたが、その年の春、帰郷して小母さんの家に同居して勤めていた。彼女は上方帰りだけに同郷の女性達より少し垢ぬけて見えたが、太り気味で決して美人とは言えなかった。私は当時、役場で物資の配給係をしていたので、当然、彼女と仕事上の関係があったし、何となく親しくなった。当時、煙草も配給で品薄だったが、入荷の日は早朝から私のために店頭と並んで巻き煙草を何時も買ってくれていた。しかし、

それ以上のことはなかった。

神社の社務所の縁側に並んで腰掛けている時、何の前ぶれもなく「岡田さんのお帰りを待っています」と言い、出発の時は見送らないと言った。それは一緒に神前で手を合わせた後だったが、当時の青年らしく、私たちは別を抱き合うこともなく神社を後にした。

出発の日はそのときより、近所の人達に送られて江見神社に参拝して必勝祈願をして神社を後にし、江見駅まで見送ってくれた。やがて津山行の汽車が来た。車内に入る時、見送りの人のなかに涙を目にいっぱい溜めている父の姿を見つけた。今考えると、父にしたら今生の別れと思っていたにちがいない。このような場合、母はどのような態度をするのか、幸か不幸か九歳の時、母と死別した私には分からない。

当時の戦況からして戦地へ送られると生きて帰る保障はない。ところが、どうしたことか、私はその時もそうだし、それから、自分の生死は全く考えもしなかった。汽車が駅を離れるため動き出した時、隣りの線に留っ

ていた貨車の影に隠れるようにして、見送りには行かないと言っていたK子が、目にいっぱい涙を溜めて私を見詰めている姿がちらと見えた。

昭和二十一年三月、台湾から無事復員した私は、その月のある日、江見の街中で、ねんねこで女の子をおんぶしたK子とばったり出会った。彼女は結婚のいきさつなど当

美作市の遺産を守り、伝承すること

安藤 由貴子
(絵本作家・美作市)

・はじめに

「作東の文化」発刊四十周年、おめでとうございます。この度、原稿のお話をいただき、身に余る光栄です。

私は、二〇〇五年より郷土の絵本を制作しています。

「地元の方の思いを形にしたい」「地域を子どもたちに伝えたい」と願い、活動を続けてきました。支えてくださった方々に改めて感謝を申し上げます。

この機会に、自身の活動を振り返ってみました。すると、「郷土を広い視野で見る必要性」を感じました。現在、地方では「過疎化問題と都会からの移住者」という人の流れが起きています。その中で、私の活動がどのような意味を

然話さないし、聞きもしなかった。だが「この子の名に岡田さんの名前の一字をもらったよ」と言った。私の本名は芳美、そのどちらかであろう。

母の死んだ時も涙を見せなかった父の、生涯一度きり眼にした父の涙だった。

成すのかを考えるきっかけとなりました。

・美作を伝えたい」という願い

私が本制作を始めたきっかけは、学生時代の恩師の助言でした。一作目を出版した後、話が絶えることなく続けてきました。その中で、地元の方々の「後世に伝えたい」という願い、地域に対する愛着に感動し、私自身も温かさや生きる勇気を与えられていることに気付きました。「美作を守り伝承する活動」は、時空を超えたおくりものとして、後世の役に立つ時が来ると思います。

・伝承活動で大切なこと

ある郷土史家の方から「残したもののしか残らない」とい

う言葉を聞きました。識字率が低かった昔、人々は家族や

地域の中で口承してきました。現代においては、豊富な記録媒体があります。それらを残し、地域コミュニティの中で話題にしたり、話を聞く、体験する等、知る機会を設けることが大切だと考えます。

・失われつつある民話に出会って

二〇一三年度は、「美作国建国一三〇〇年」でした。私は「美作の民話集―古からのおくりもの―」を執筆する機会をいただきました。制作過程「民話の中には、道徳感、ユーモア等、生きていく知恵が書かれている」と強く感じました。それが、脈々と語り継がれてきました。しかし今それが失われつつあり、私たちはその時代の狭間にいることに気付きました。美作の民話が、古からのおくりものとして、次世代に渡ることを祈っています。

・私にとって郷土の本を作ること

昔の人々は、厳しい自然、怪我や病氣と向き合い、力を合わせて生きてきました。私は、本制作の過程で、「生きることとは何なのかを考えさせられている」と思うようになりました。何のために生きているのか、未来をどう生かせるのか、それを知るために先人の生き様を見ているのかもしれない。まさしく「温故知新」です。

・おわりに

都会出身者が田舎に移住するイターナーが注目されています。彼らは、効率第一の価値観から離れ、互いに助け合う地域コミュニティを求めているそうです。そして「あるもの」に価値を見出し、再生、開発をされています。一方、地元で生きてきた人々には、「守ってきたもの」があります。知恵や技術を引き継いだ軌跡は、地域の魅力です。このように様々な視点で見直されていることも柔軟に捉えながら、大切なものを守り、伝承していきたいと思っています。



江見小学校

岡山県文学選奨入選者寄稿

作東中学校三年A組 N藤学級の思い出

平成四年 第二十七回

植野 喜美枝
(南海出身・玉野市)

誰にも若かった時はある。今から四十年近く昔、私は十五歳の中学三年生、青春まつた中であった。

その頃の作東中学校は、一学年が百六十人、制服は今と変わらないセーラー服と詰襟学生服だったが、女子は髪の毛が襟にかかってはならず、男子は全員丸刈りだった。中学生は中学生らしく、「気力、体力、協力」の三力精神をモットーにそれぞれが勉強やらスポーツやらに日夜励んでいたのだった。

私がいた三年A組の担任の先生は、N藤Y晴先生だった。担当教科は国語。当時は四十代だっただろうか、四角い顔にタワシのような角刈りヘア、太くて濃い眉毛にぎよろりとした眼、大きな口に大きな声、何となく「坊ちゃん」に出てくる山嵐をほうふつとさせるような容貌だった。

いつの時代にもお調子者やにぎやかな生徒はいるもので、先生の口癖は「けじめをつけなさい」だった。行き過

ぎたからかいが誰かを傷つける前にきちんとストップをかけてくださった。

修学旅行で九州に行つて、長崎の九十九島に泊まった。夜は女の子同士で恋バナに花が咲いたり、消灯時間を過ぎても騒いでいて、先生に「けじめをつけなさい」と注意されたりした人もいたようだが、疲れて早く寝てしまったの後は知らない。阿蘇山に登つて、煙を吐く噴火口や広大な外輪山や草千里を見たり、仲の良かった友達の人さんと一緒に草千里を全力で走って駆け降りたりしたこともいい思い出だ。

秋の運動会では仮装行列をした。出し物は各班の自主性に任せて割と自由に決めさせてもらった。当時流行っていた映画「レイダース、失われたアーク」の仮装をすることになり、班の友達と放課後残つて段ボールで棺桶を作った。当日、棺桶を引っ張る役がなぜか私で、髭もつけたほうが本物らしくていいということ、顔に墨汁まで

塗られてしまい、もうほとんどやけくそで、棺桶を引っ張つて、砂ぼこりの立つ運動場を一周した。次の出番が三年女子全員の手作り浴衣を着ての踊りだったから、髷面で浴衣はまずいだらうと必死で顔を洗つて大急ぎで浴衣を着た。踊りが終わってからAさんと一緒に浴衣姿で記念写真を撮つたが、後で写真を見たら、あこのあたりに拭き残した墨が残っていた。

N藤先生のことまで心に残っているのは、卒業式前日の

最後の国語の授業だった。先生は黒板に担任の「担」という字を書いて、「タン」になう」と読みがなをつけられた。

「先生は何を担っているんですかあ？」

と私が質問すると、N藤先生は真面目な顔で、「重責を担っているのです」

と静かな声で答えられた。明日は学び舎を巣立つて行く十五歳の教え子たち一人一人の未来に思いをはせておられたのだろうと思う。

ふるちよの風景

平成十四年 第三十七回

長瀬 加代子
(上福原)

私は徳島の生まれだが、小学校から高校卒業まで、作東の地で過ごした。だから、私のふるさは、今、住んでいる所と思つている。長い間、町の外で暮らして、五十歳を過ぎて、ふるさに戻り、二十五年になる。

いつの頃からか、雑文を書くのを趣味として、これまで同人誌に発表した作品を本にまとめた。(短編小説作品集三冊、童話一冊)

私の書く小説は短いものばかりで、ストーリーは単純で、作品の中で描く風景や建物は、ほとんど作東の地の周

辺のものを使っている。

平成十四年度、岡山県文学選奨に入選した「母の遺言」に、レンゲ畑が出てくる。このレンゲ畑は、平素買物に行く途中に眺めた風景である。

この五月に出版した本の中、老人夫婦の一日を描いた作品に、お寺、オルゴール館、道の駅など書いているが、お寺は蓮花寺、オルゴール館は、以前、東栗倉にあった建物、道の駅は彩葉茶屋をモデルにしている。

他の作品にも、休耕田に咲くコスモスの風景、姫新線を

走るデューゼル・カー、植林した松林、山裾にひっそりと佇むおじぞうさんなど、作東地区の風景、建物が登場している。ふるさと百選に入るような場所ではないが、私の作品にとつては重要な素材である。

その一つ、山家川の岸辺を真っ赤に染めるように咲いた彼岸花は情熱的で妖艶に見えて、恋の物語にピッタリの背景になった。

しかし、こうした風景は少しずつ変わり、なくなったり、他の場所へ移ったものもある。

彼岸花が咲く土手は、山家川の河川工事によってプロックに変わり、花は消えた。

里見明の思い出

いよびんおぼろびん

里見明

(二代会長)

自分史を書くかと思っていたが、相田みつを先生のことば「浄瑠璃の鏡の前に立つまでは秘めておきたしあのこともこのことも」相田みつを先生の言を思い出し、はたと考えた。なぜなら、自分史とはそもそもなんだろう。

自分史を書くかと思っていたが、相田みつを先生のことば「浄瑠璃の鏡の前に立つまでは秘めておきたしあのこともこのことも」相田みつを先生の言を思い出し、はたと考えた。なぜなら、自分史とはそもそもなんだろう。

さて、その所以とは、聞きなれないことばなので、何度も読み返してみたが、その時の私には理解できなかった。むしろ私の頭には異様なことばとしか受けとれなかった。旧制中学校を卒業して五十年目を迎え、記念文集を作ろうというところで編集委員会を構成（神戸市）、五名のうちのひとりとして何回か出席したある日のことである。

「これ、日本語かいな」「どこかの方言やろ」とか、気おけない連中はばかりなので、めいめい好き勝手に話していた。私のすぐ横にいたその言葉を書いた本人K氏が、「お前ら知らんのか。ちゃんと辞書にのつとるで。この前もNHKのアナウンサーが使ったで」と言った。四対一だったが、きっぱりと自信をもって言い切った。早速、辞書を引くと、彼の言葉どおり明記してあった。何ともおそまつな編集委員である。旧東京電気通信学部出身の彼がさりげなく使っている言葉を、国語にかけてはと多少うぬ

東粟倉の林の中に建っていたオルゴール館は、温泉街移り、姫新線の車両も三両編成だった頃から、今はたった一両になり、車両の響きを聞く回数は減った。

休耕田に咲くコスモス、レンゲ畑も目にしなくなった。「作東の文化」に、時々、随想を出しているが、「江見のまち」けごや坂「美原橋」などにも、ふるさとの風景の移り変わりを書いた。

歳月が経つとともに、ふるさとの風景が変わったり、なくなるのは寂しいが、自分の生きた足跡として書いた作品の中に、ふるさとの風景が残り、作品に美しい彩りを添えていることを、自分なりに嬉しく思っている。

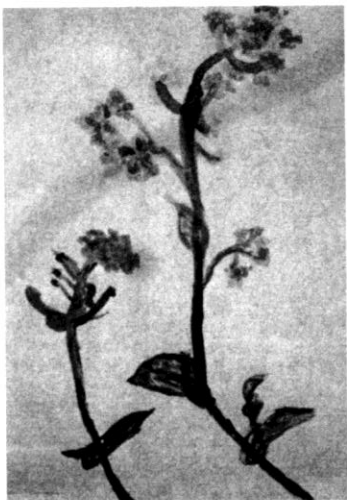
自分史とは自分にとって真実でなければならぬ。自分のかつこいい部分だけをならべたのでは自分の本心にそむくことになる。まして私のような未熟な者には人様には秘めておきたいことがあるは「杖拳に違あら

ぼれていた私は完全に一本とられた形である。まことにお恥ずかしい限りであった。相田みつを先生の「自信はなくてうぬほればかり、ああはずかしい、はずかしい」の言葉が頭をよぎった。

今一つ、この場にあてはまるかどうかは別として多数決、必ずしも是でないということも思った。自分のしていることがいちばん正しいとか、自分の技量が人よりすぐれていると思うことも大切かもしれないが、その前に、このことが自信か、うぬほれかを正しく判断できる心と謙虚さをもつことが大切だと思う。

「ことほどさように」 〓 事程左様に

副詞…それほど、そんなに



土居小学校

文化活動は私の生き甲斐

横山 猛
(五代会長)

作東町文化協会に、私が入会したのは昭和六十年。早速、文芸部理事と編集委員とを仰せつかった。

当時の会長は沖田正秀氏、副会長は里見明氏と三木貞氏であった。今、手元の『作東の文化』第十一号に目を通してみると、懐かしい人々の名前がずらりと並んでいる。第十四号からは、表紙がカラー写真となり、会員の作品が一段と映えたものになっている。その後、平成十三年から十六年まで副会長を、平成十七年から二十年までは会長を務めさせていただいた。

平成十七年七月十二日には、美作市文化連盟の設立総会が開かれ、連盟が発足。作東町文化協会は「美作市文化連盟作東文化協会」として再スタートを切ることとなった。そして今では、県下有数の文化協会となっている。これは偏に、役員をはじめ会員全員の活発な文化活動の展開と組織の組み立て方によるものであろう。

さて、現在の私は、筆名の世界の活動がほとんどである。内容は、各地の万葉講座と短歌教室の他に、岡山県短歌大会・岡山県文学選奨・香々美川文学選奨・津山朝日読

者文芸短歌などの選歌である。市内では、文芸愛の小径、

を記念して思い立った「文芸愛の小径短歌大会」の三回目を開催し、短歌愛好者の皆さんに喜んでいただいている。(歌碑・句碑合計八十二基―平成二十三年完成―建立にあたっては、当時の谷口会長に大変な御苦勞をかけてしまった―)

このように、かなり多忙な日々で、ぼつぼつと落ちくる雨垂れぶつぷつと切れゆく記憶はつぼつ「終着」と。今日もまた予定を手帳に書きをりぬ明日のあるを疑はずして、という思いの間を行き来している有様ではあるが、全く苦にならないのが不思議である。これはきっと、文化協会に入会してからの三十年近い文化活動の楽しさが身に沁み込んでいて、生き甲斐となっているからに違いない。誠に、文化協会とは有難い存在である。

その作東文化協会が、この度、発刊四十周年記念号の『作東の文化』を発刊されることは、この上ない喜びである。心からお祝いを申し上げると共に、益々の御発展を祈るばかりである。

〳〵四十年の月日を積み来し作東の文化誌

成らば祖に捧げむ

文化誌に恋して

谷口 重人
(六代会長)

今、この机の上に、作東の文化誌十九号から三十九号までの二十一冊が積み上げられています。この全冊に谷口重人の名があります。

最初は事務局の担当者として、編集委員として、編集長として、また会長として…。

二十一年間、作東の文化誌四十号のうち、その半数に直接参画したことになります。このことは私にとって誇りであると同時に大きな責任を感じています。この間に本誌が発展したか後退したかは後世の評価に委ねるとしても、その多くの責任を背負って行かねばならないと思っています。

この間、種々な想い出があります。二十九号で岡山県文学選奨小説部門で受賞された長瀬加代子さんの作品を転載できた時、三十号記念誌で協会の沿革史を編集し、記念号らしい記念号ができた時、三十三号であさのあつこさ

んのエッセイを書いていただいた時、これ等は編集子と

してのやり甲斐を感じたことでした。反面、最大の危機は、作東町時代、文化誌の編纂を委託事業として委託料の名目で六十万円の補助金を受け、資金の苦勞を知らずに編集に専念できていたものが、町村合併によって美作市となり、一気に補助金が三十二万円と半減した時でした。発行を断念するかという所まで追い込まれながらも当時の理事会の支援を得て他の事業を圧縮し、四十五万円の手算を確保。減員、紙質のダウン・写真版の縮少等、編集者として最もやりたくないことをした上で継続発行にこぎつけたことでした。

この文化誌に対する私の想いは、三十号記念誌の末尾編集後記に記述した文章を引用する形で書かせていただきます。

四十周年記念号を編集するに当たって協会の沿革史を

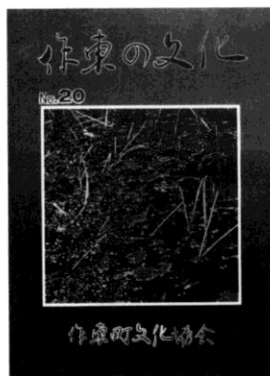
作東文化協会 沿革史

蝸牛のような

歩みであったかもしれない

それでも歩みつづけた40年

その軌跡がここにある…



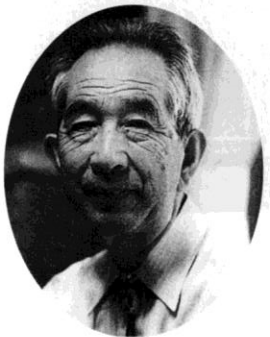
補完しました。その記録の掘り起こし作業を進める中で、先輩達、特に創世期の先輩達がいかに苦勞を積み重ねて、その基礎を築いてこられたかを思い知らされました。会員九百人という自慢に値するこの組織も幾多の試練を乗り越えながら、ゆつくりと、しかし着実に成長して来たということでした。

作東地域の文化と名付けて他に誇れるものは、美術館と図書館、そして我が文化協会だと思っています。中でも文化誌の発刊は、文芸部門の発表の場として、また協会の機関誌として、内容の稚拙さはあるとしても、その底辺の広さと四十号という歴史の積み重ねは他に例を見ない文化活動だと思います。

願わくは、この灯を消すことなく、さらに発展できますよう、会員諸氏のお力添えを期待して止みません。



ちぎり絵 香山律子

年 月	事 柄
昭和41年11月 42年5月	<p>広報「さくとう」に文化協会会員募集掲載（会の趣旨、活動方針等）文化協会設立準備会開催。準備会会長に、阿部正登を選任し、サークル活動を中心に会員相互の親睦と研修によって町の生活文化を高めようと文化協会の設立を決定する。</p> <p>準備委員氏名 横山捷彦・沖田年雄・川端貞心 岩崎勝代・長家清子・高田三爾 衣笠武史・藤生昌宏・春名幸男 永谷 要・岩本文夫</p> <p>部会名①書道部 ②絵画部 ③工芸部（彫刻、染色、編物、手工芸） ④園芸部（盆栽、盆石、花づくり） ⑤茶華道部 ⑥碁将棋部 ⑦文芸部（短歌、和歌、俳句、川柳等） ⑧音楽部（器楽、舞音楽、舞踊、朗吟等） ⑨写真部（視聴覚器材の利用も含む） ⑩歴史部（文化財その他）</p> <p>作東町文化協会発足。会則を定め、年会費三〇〇円とする。</p> <p>会長に、阿部正登を選任し、副会長に、横山捷彦・岩本文夫を選任。</p> <p>『作東町の歴史』発行。</p>
7月	 <p>阿部正登</p>
9月	

42年11月	<p>第一回作東町文化展覧会（二日～三日） 作東中学校屋内体操場に於いて開催。 出品数四八七点 参観者一、三〇〇人</p> <p>第二回文化展覧会要項決定。『以後の文化展覧会開催の基本となる』</p> <p>①趣旨 町内から作品を公募し、これを展示して広く町民に鑑賞の機会を提供するとともに、作品の向上をとおして地方文化の進展に寄与することを目的とする。</p> <p>②主催 作東町文化協会</p> <p>③後援 作東町・作東町教育委員会</p> <p>④期日 11月3日～11月4日</p> <p>⑤時間 午前8時30分～午後5時まで</p> <p>⑥作品 第1部 日本画及び洋画 第2部 書道 第3部 工芸（彫刻、手芸、染色、編物など） 第4部 盆栽、盆石、鉢花 第5部 俳句、短歌、川柳 第6部 写真 第7部 歴史に関する資料 第8部 生花、茶道 第9部 音楽、舞踊、朗吟、囲碁、将棋の実演</p> <p>⑦出品 一部門につき三点以内</p> <p>⑧出品料 一般三〇〇円、高校生・大学生五〇円、但し、会員は無料</p> <p>⑨第二回文化展覧会開催。（三日～四日） 「郷土の植物標本集」「今昔紙幣集」の特別出品を含め出品数三八〇点 文化協会と文化財保護委員会の提唱で『蛭を守る運動』が展開される。</p> <p>『第一回町内歴史めぐり』福山・土居地区の神社めぐりを実施。</p> <p>第三回文化展覧会開催。（三日～五日、予定を一日延長し、三日間開催）出品数三四〇点 作東町文化協会だより（年二回）発行を決定。十一月創刊号を発行。</p>
43年7月	
44年6月 8月 11月	
45年8月	

年
月

事

柄

9月 11月
46年 11月
47年 2月
48年 7月
49年 11月
50年 10月
11月

神原正見 作東町長に就任。
 第四回文化展覧会開催。(二日～三日)
 第五回文化展覧会開催。(三日～四日) 出品数四七〇点(出品料 無料)
 江見小学校屋内体操場落成。
 第六回文化展覧会を三日～四日に作東中学校屋内体操場と江見小学校屋内体操場の二会場で開催。
 作東町中央公民館落成。
 第七回文化展覧会を三日～四日に作東中、江見小の二会場で開催。 出品点数一、〇〇三点
 第八回文化展覧会を二日～三日に二会場で開催。出品点数八〇六点
 中国自動車道開通。【吹田～落合】
 『作東の文化』誌 第一号発刊。
 編集者 岩本文夫 (B5版)



文化誌 第一号誌

51年 11月
11月
6月
10月
11月
53年 1月
9月
10月
54年 7月
11月
11月

『作東の文化』第二号 第十回文化展覧会記念号として発刊。(B5版18ページ)
 (有料配付二〇〇円) 編集者 高田三爾(以後59年度まで)
 第十回文化展覧会を三日～四日に小・中学校の二会場で開催し、小学校会場では津山少年合唱団の合唱や公民館琴講座生による琴と尺八の合同演奏が行われた。また、同時に中央公民館に於いては所蔵書画展が文化財保護委員会と共催で開催され、茶席も開設された。
 文化展の出品点数八六九点
 総会に於いて、会則を改正し役員に参与を新設して、役員の充実を図る。
 参与は、次の団体が当たる。(婦人協議会、老人クラブ連合会、文化財保護委員会、青年協議会、商工会、小学校長会、中学校長会)
 副会長に、高田三爾を選任。
 『作東の文化』第三号を発刊。(A5版25ページ) 寄付者名簿掲載。(有料配付二〇〇円)
 第十一回文化展覧会開催。(三日～四日) 出品点数九三二点
 文化財保護委員会が所蔵品展を開催。文化協会は後援。
 江見晴則 作東町長に就任。
 『作東の文化』特集「作東の四季」第四号(A5版36ページ)を発刊。
 寄付者名簿掲載(有料配付三〇〇円)
 第一回文化講演会開催。
 第二回文化講演会開催。
 『作東の文化』特集「夏に想う」第五号(A5版43ページ)を発刊。
 寄付者名簿掲載(有料配付三五〇円)
 第十三回文化展覧会に子供広場を新設し、人形劇、子供向け漫画映画等の上演のほか、乳幼児のための手作りおもちゃの展示と実演コーナーを加え開催。
 『作東町の歴史』発刊。

年月

事

柄

55年10月

『作東の文化』特集「春の随想」第六号に、文化協会の運営資金をつくるため広告を掲載し、広告料五、〇〇〇円、一、〇〇〇円をいただく。(有料配付三〇〇円)

56年11月

第十四回文化展覧会の開催期日を農繁期を避けるため十一月二十二日、二十三日に変更。第一回作東町ふるさと祭り(行事となる)また、文化講演会(作東中学校)も町の開催となる。

57年4月

『作東の文化』第七号より特集をやめ発刊。(A5版60ページ) 広告掲載(有料配付三〇〇円) 総会により文化協会会長に、沖田正秀を選任。

58年4月

副会長に、里見 明・高田三爾を選任。

59年7月

『作東の文化』第八号(A5版68ページ) 発刊。

60年4月

広告掲載(有料配付二〇〇円)

61年11月

作東町より文化協会に委託料が交付される。

62年4月

作東町制三十周年記念式典。

63年3月

町村合併三十周年記念事業として十月九日、十日に文化展覧会開催。

64年4月

映像部を新設。(ビデオクラブ会員募集)

65年4月

作東海洋センター落成。

66年4月

『作東の文化』第十号記念号を発刊。(A5版60ページ)

67年4月

有料配付二〇〇円

68年4月

副会長に、三木 貢を選任。

69年4月

『作東の文化』第十一号より編集者

70年4月

文芸部長 山本 章を選任。

71年4月

日韓書画交流展を中央公民館に於いて開催。(七月二十七日、二十八日)

72年4月

第十九回文化展覧会の会場を海洋センターに移して開催。

73年3月

文化協会会員募集開始。(会費五〇〇円*二口以上、賛助会員五〇〇円)

74年4月

『作東の文化』第十三号を町内全戸に配付。

75年4月

書初め書画展を改め第一回『春の書画展』開催。

76年4月

会則を改正して、芸能部を追加し、年会費一口一、〇〇〇円。

77年4月

文化協会の活動を拡げるため、支部(学区単位)組織を創設し、支部長を置き、各部落には評議員

78年4月

を置いて地域に即した活動を進めることとした。

79年4月

各支部長には、

80年4月

副会長に、長家清子を選任。

81年4月

第一回会員研修旅行を実施。

82年4月

副会長に、(ならシルクロード博)

83年4月

第二回『春の書画写真展』開催。

84年4月

副会長に、益田直子を選任。

85年4月

第二回会員研修旅行を実施。

86年4月

(京都嵯峨野めぐり)

87年4月

第三回春の書画写真展と文化講演会を開催。

88年4月

作東バレンタインプラザ落成。



里見 明

- 江見地区 末宗秀夫
- 豊野地区 久保照夫
- 土居地区 井崎 修
- 福山地区 香山勇作
- 栗井地区 原 利保
- 吉野地区 小林良矣



沖田正秀

年	月	事	柄
4年	4月	吉野支部長に、小坂田 貢就任。	
7月		第三回吟詩舞道大会を江見小学校屋内体操場に於いて開催。	
5年	1月	作東町役場庁舎移転。	
4月		作東町制四十周年記念式典。	
4月		副会長に、安東靖子を選任。	
10月		文化芸術センター落成。	
6年	4月	粟井支部長に、松本寿豊就任。	
4月		第一回「春の絵画展」日本画グループ展始まる。	
7年	5月	第二回「春の絵画展」油彩グループ展開催。	
7月		第六回吟剣詩舞発表会開催。	
7月		納涼茶華道展開催。	
9月		古文書を読む会始まる。	
8年	5月	第三回「春の絵画展」日本画・洋画グループ展開催。	
9年	3月	「春の書・画・写真展」及び文化講演会開催。	
4月		文化協会会員数一、〇〇〇人を突破。	
10月		会員研修旅行に一二九名の参加があり、バス三台で広島県瀬戸田町《平山郁夫美術館等》へ実施。	
10年	9月	春名 宏 作東町長に就任。	
11年	4月	文化協会会長に、圓東順一を選任。	
4月		副会長に、横山 猛・真野みよ子を選任。	
4月		土居支部長に、根岸勘男就任。	
10月		「作東の文化」第二十五号より文化協会の事業及び決算報告を掲載。	

12年 3月 4日
 11年 4月 4日
 13年 4月 4日
 14年 4月 4日
 15年 4月 4日
 16年 10月 10日

「春の書画写真展」及び文化講演会開催。
 「作東の文化」第二十六号より編集委員長に谷口重人就任。
 阿部正登（雲魚）米寿記念展開催。
 美作町湯郷 文化センターに於いて吉本興業の前座を芸能部が務める。
 第三回舞の会開催。
 情報映像部文化協会のホームページを開設。
 作東バレンタインプラザの展示場に会員の作品を月替わりに継続展示。
 土居支部長に、春名貞和就任。 福山支部長に、青山時弘就任。
 歴史民俗資料館落成、開館。
 「作東の文化」第三十号文化誌（三十周年記念号）発刊。
 連続して開催して来た文化展覧会が第三十八回を迎えた。



圓東順一



横山 猛

年月

事

柄

17年3月
3月
4月
4月
4月
4月
7月
18年4月
10月
19年4月
20年1月
4月
11月
12月
21年3月
3月
4月
4月
4月
5月
6月

春の文化展・芸能発表会開催。
六町村が合併し、美作市が誕生。
宮本俊朗 美作市新市長に就任。
文化協会会長に、横山 猛を選任。
副会長に、谷口重人を選任。
粟井支部長に、名部竹夫就任。
町村合併に伴い、「美作市文化連盟」発足。
作東町文化協会は「作東文化協会」と名称変更。
吉野支部長に、黒藪義昭就任。
連続して開催してきた文化展覧会の第四十回目を開催。
江見支部長に、新田祐之就任。
生涯学習まつり「パネル展」出展。（大原武蔵武道館）
粟井支部長に、内藤善晴就任。
美作市吟剣詩舞道連盟設立発表会（英田公民館）
美作市文化連盟文化祭第一回芸能発表会（美作文化センター）
美作市文化連盟文化祭第一回作品展（作東海洋センター他）
美作市日本舞踊連盟設立第一回発表会（美作文化センター）
安東美孝 美作市長に就任。
作東文化協会会長に、谷口重人を選任。
副会長に、松本正人・鳥形初美を選任。
『作東の文化』第三十五号より編集委員長に、新田祐之就任。
美作市囲碁連盟設立第一回大会（改善センター）



谷口重人

22年10月
11月
11月
25年4月
4月
4月
4月
4月
26年3月
10月
4月
10月

八月集中豪雨による甚大な被害のため第四十三回文化展覧会を中止。
福山支部長に、原 洋一就任。吉野支部長に、上山征夫就任。
国民文化祭参加。（大原会場）
国民文化祭参加。（英田会場）
道上政男 美作市長に就任。
作東文化協会会長に、内藤善晴を選任。
副会長に、春名貞和・妹尾美智子を選任。
土居支部長に、谷口重人就任、粟井支部長に鳥形初美就任。
吉野支部長に、春名道雄就任。
萩原誠司 美作市長に就任。
豊野支部長に、円東秀章就任。
『作東の文化』（発刊四十周年記念号）発刊。



内藤善晴

（敬称略）

所感寸云

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



写真 末元正和

午年

井上健一

私は昭和二十九年の午年生まれで、今年還暦を迎える。そこで今回は馬に関連した話を紹介しようと思う。馬と人のかかわりは、原始時代から続いているようである。後の世に発見された原始時代の壁画が、これを物語っている。

午年は十二支の干支では七番目の位置になっている。なぜ午の漢字をうま年に当てたのかを調べてみた。

午の漢字の意味は、突き当たるとか、逆らうとかという意味だと聞いている。深夜十二時を午前零時と呼び、昼間の十二時を正午と呼ぶことにも、納得がいく話である。午の刻は正午前後となり、方位は真南である。

なぜ馬が午の漢字に割り振られたのかについて考えてみた。

馬は生後まもなく立ち上がり、数時間後には、駆け出すと言われている。これは縞馬などのように野生で暮らす草食動物の特徴でもある。馬に限らず、肉食動物と共に生活している草食動物は群れを作り、生後まもなく起き上がる。肉食獣の餌食にならないための自然の法則である。

話を元に戻そう。

馬は世界中の歴史でも大活躍している。ギリシャ神話に登場するトロイの木馬は有名である。アメリカではカウボーイが、馬に乗っている。足の太い馬は力も強く、農耕や運搬用

として、活躍していた。現在でもどこかで活躍していると思う。

馬は立ったまま眠るとさえ言われている動物で、倒れる時でも左には倒れないとも聞いている。物事がうまくいくとか、幸福が駆け込むとか言われている。

「うま」を逆にしても「まう」となり、舞い上がるの代名詞にもなっている。こんなことから、縁起の良い動物とされているが、恐れられている面もある。

馬は火を呼ぶ動物とも言われている。次回周りの「ひのえうま」の出生率が低いのは、この迷信から出ているようである。

馬は信仰の世界にも深い関わりを持っている。七夕祭りにはナスやキ

ユウリにツマヨウジやマツチの軸を立てて、馬の形にした物を備える風習がある。

仏教界では観音様の頭の上に馬の

住めば都

衣笠集 巳

首が載った馬頭観音がある。

このように人との関わり深い馬の一部を紹介させていただいた。

れた。「あの家の息子は官僚、こっ

ちの家の息子は大企業のお偉いさん。うちの集落は勉強のできる子が多くて、今はみんな島を出て東京だ。」地域の誉れを語りつつ、その目は寂しげだった。このことは地方から都会への人口流出と、少子化で、やがて全国の市町村の半数が将来消滅するかもしれないと。

いやはや恐ろしい話だが、実際、迫

りつつあるのは確かだ。

古い民謡に佐渡おけさというのがある。佐渡で金鉱が発見され、好景気に沸き、サドへサドへと草木もなびくと唄われた。今はどうだろう。エドへエドへと草木もなびくである。政治・経済・文化すべての中心であり、荒廃して行く地方には目もくれず、やりたい放題である。

地方の若者はそんな巨大な磁石に吸い寄せられ、故郷を後にする。かつて昭和三十年代、若者が金の卵と言われ、希望を胸に集団就職したのと状況が違う。あの頃の田舎は総領さえ家に残せば、他の子は口減らしでどこへ飛ばうと家は安泰であった。だが今はどうか。数少ない子に両親共働きで稼いだ金は全部学費に注ぎ込んで教育をつけ、都会へ出たら最

後、殆ど帰っては来ない。首都東京が発展すれば喜ぶべきだろうが、どうもその気になれない。それは年をとると、物事を僻ひがんでとるから困ったものだ。

有史以来、地方には地方なりの伝統・文化があり、大切に継承して来た。時には食糧難で瀕死状態の都会人を救ったのは地方のパワーだったかもしれない。それが衣食住、足りて平穏なはずの今時、こんな羽目にならぬとは想像もしてなかった。

田舎にかつての活気を取り戻すことは既に手遅れだろうが、政治家や賢い人は田舎の実情を理解し、真剣に取り組んで欲しいものだ。我々のような老人にはこんな難題を克服する知恵も力も時間も無い。ただ思うのは多くの企業が安い賃金と大きな

市場を求め、競って海外へ進出しているが、いざ賃金も高騰し、折角の高度な技術も乗っ取られ、新興国が台頭してくる。

そしてどこかの国のように、恩を仇で返す結果になりはしないか。そうなる前に国内へ方向転換し、地方へ進出すれば地方にも活気が戻るだろう。過疎の地でも金鉱が見つければ人は寄って来る。人が多くなればなんとかなるだろう。

老いのたわ言

吉政実夫



今回は、そう簡単に解決できる問題でないことを承知で敢えて餅の絵を書いてみました。

今年の夏は格別暑かったなあ、梅雨で大荒れしたなあ、と言ってるう

ちに、先輩や友達は亡くなり、ふと気付くと我九十七歳、残り少ない余命

はみえたようだ。だが、死にたくもなし。

仏教では、過去・現在・未来と教えてくれますが、我が後生とは

極楽が九つ、地獄が八つあると教えてくれています。

何処へ逝けるかなあ。

我は神仏に守られて長寿に恵まれながら、一生造悪煩惱の火は消えず、地獄一定とは思いますが、阿弥陀様は、懺悔反省する者は一人残らず助けんと、四十八通りの大誓願を授けてくれて、我れ頼め二心なく誓願。他力本願を聞き開き念じよ。念仏南無阿弥陀仏を念じよ。と御約束してくださっています。

仏道とはここにありと弥陀の誓願念じつつ、逢いたいなあ、逢いたいなあ、父ちゃん、母ちゃん、逢えるかなあ。母ちゃん…。

流るる雲やせせらぎは今も昔も変わりなく、日毎に変わる我が生業伝えたいなあ。あの人この人、有縁人々

集まりて、俱会一処と水入らず。夢・夢。

現在社会では、後期高齢者の医療費がどうのこうのと言っているが、後期高齢者になれずに、事故死する者、急死する者でも、後生のない者は一人もいません。我も後生の一大事の解決もこの年齢になりながら逝く先もわからない旅立ちとは…。

とりとめもつかないままに、たわ言を並べました。永年にわたり、有難うございました。



随筆随想

おりにふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



洋画 安東公一

爺さん「グランパー」の独り言

安東公一

小生、昭和十一年生まれの喜寿である。七年前、妻に先立たれ、途方にくれたが、今は、歩いたり、走ったり、けつまずいたりしながらも、自分らしく、気負いなく、人に媚びずに、感謝の気持ちで生きている。

妻が逝った当時は、途方に暮れ、生きる希望もなく、妻のために、「卓子の千の風庭園」を作ったり、油絵を描くので、アトリエの隣に趣味で四十七回行っている海外旅行の思い出の部屋を作ったりして生きてきた。

そして今、生きていられるのは、隣の人たちの優しさや、七十歳まで会社経営をしていた当時の部下達は今でも、食事をしてくれたり、コー

ヒー・ブレイクに来てくれたりするところが嬉しく、感謝しているこの頃である。今では、封印していた海外旅行も孫娘とグランパーのハワイ八日間の旅を楽しんだり、息子と男二人の弥次・喜多の旅をしたりしている。子供や孫たちの優しさを嬉しく思うこの頃である。

生きると言うことは、この歳になると一人暮らしは本当に厳しかったり、寂しかったりするものであるが、私は「Light Begin For 75 Old」：「七十五歳が私の新しいスタートの年」としている。

妻と行った海外旅行は、ハワイ四回、バリ島、オーストラリア、十八日

間のヨーロッパの旅などあるが、今、特に印象に残っているのは、妻と初めて旅した、銀婚式のハワイだろう。妻を毎日朝六時に叩き起こし、ワイキキの海辺のホテルを毎日変えて朝食に行った。青い空の下、白砂を踏みしめながら「いろんなことがあったけど……ここまでやってきたな……」と言って、苦しかった会社経営のこと、子育てのこと、などを思い出し、ワイキキのブルーの海を眺めながら、バイキングを食しながら感慨に浸ったのもいい思い出。

そして、第二には六十一の還暦記念で行った、全国のオーナー夫婦（二〇組）と行く、イタリア・フランス二ヶ国に絞った十八日間ヨーロッパの旅だろう。ノルマンデー・ドーブル・オンフルール・モンサン・ミッセ

ルやカプリ島等、当時あまり行かない充実の旅だった。十八日間の旅だったので、二日間フリータイムの日があった。二人でスペイン広場界隈を散策したり、ある日は、英語のできるドライバーを雇い、ミラノからフレンツェへドライブしたりした。

そして、ローマでもツアー前の間、石畳を踏みしめて、二人でサーカス（大きな四つ角）に行き、カプチーノを飲みながら、「いよいよここまで来たな……これからは、自然体で流れに任せ、生きていこうぜ……」と話したのを思い出す。

旅から帰り何日か経ち、妻から「いい人たちだったね。私たちも負けずいい夫婦になろうね」「私、一つお願いがあるんだけど。私たちには名前があるのだから、おい、オトウサ

ンではなく、公一さん、卓子さんにしてくれる？それが私の希望」と言われ、困ったことになったと思っただが、十年後、突然に妻が亡くなるまで続けることができた。「公一さんを送ってから逝く」が口癖だった人が先にサッサと逝ってしまった。

老いを元気に

原 洋一

古希を過ぎる頃から、気になっていたことがあった。それは、自分の体質というか、身体の弱点である。

もともと酒は飲めない体質であり、煙草は十五年前に止めた。今話題の「メタボリックシンドローム」と言われる肥満や脂質、糖質異常も今のところはな

二人して、趣味に生き、六十一の頃からの二人はいい夫婦だったと思う。「今、命有るは、ありがたし」と思い、妻の記念の庭園のオリブの木に実が成るのを楽しみに生きているこの頃である。七十八歳の爺さん（グランパー）の独り言である。

ところが五年前に、若い頃にスポーツで傷めた膝をかばっているうちに、反対側の膝の半月板を損傷してしまい、正座ができなくなった。もともと腰痛持ちであったこともあり、足腰に不安を覚えるようになった。いわゆる、「ロコモティブシンドローム（ロコモ）」への不安である。

近年、日本人の平均寿命は飛躍的に伸びた。しかし、その一方で、健康寿命と平均寿命の差が大きく広がり、男女差はあるものの、約十年もの開きがある。「長生きしても果ては介護」という現実、いくら長生きしても、身体が思うように動かせなければ充実した生活は送れない。やっとな自由な自分の時間ができた老後だ。元気で楽しみたいと思う。寝たきりになつての長寿ではつまらない。

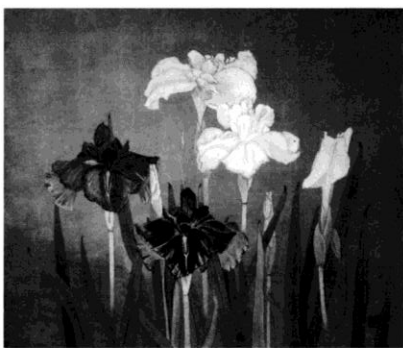
元来、動くのは苦にならない方なので、自分の体質、弱点に合った健康への取り組み、ロコモ対策を自分流に組み立てた。一つは、まず、朝起きたら、ベッドの中で、ストレッチ、腰痛体操、そして筋トレなど、十数種類程度をおよそ三十分かけて実施する。次は起床して、ラジオ体操を十分間

する。これらは毎朝である。なかなか習慣化することが難しく、初めは苦勞したが、一年近く続けられている。その成果か、足腰の故障で止めていた、大好きな太極拳をも再開することができた。週に一度は練習に通えるようになった。若い頃のような激しい運動は無理であるが、太極拳は動きがゆっくりしていて、長く続けられそうである。好きな曲を流し、家でもマイペースで楽しんでいる。心までゆったりとしてきて、精神的にも良いようである。

これから身体は確実に老化、劣化してゆく、その延長上にロコモはある。趣味や田舎暮らしに、まだまだ余生を楽しみたい。自分が元気であることはまた、最大の妻孝行でもあると思うので、この三本柱を大切にし

て、健康で活動的な老後で、元気にしたいと願っている。

「願はくばピンピンと古い永らへてコロリと死なむ花の下にて」
と西行を思うこの頃である。



日本画 寺 師 喜代美

思い出

長家 克子

昭和二十年八月十五日、敗戦、六十九年も前のことです。外地に住んでいた日本人は皆、祖国日本に帰国することにになりました。当時、朝鮮の釜山に住んでいましたので、父が引揚げの手続きをしてくれ、九月七日午前十時出港の引揚船に乗ることになりました。子供四人だけ先に帰り、父は父の会社の残務整理が終了して、帰国することでした。

重いリュックを背負って、乗船の列に並び、米兵や韓国女性の検査官の検査を受け、証明書等もらい、乗船しました。引揚げ乗客は満員で、私達は甲板に荷物をおろして座りました。

九月七日午前十時頃出港。よく晴

れて、玄海灘は静かで、時々飛び魚が飛び上がり、光るのを初めて見ました。それまで幾度か関釜連絡船に乗りましたが、夕方乗船し、到着しようにすることで、昼運航するのは初めてでした。この美しい静かなうねりの玄海灘を旅するのは、最後だと感無量で涙が出ました。

夕方仙崎港で上陸。仙崎の駅から列車で下関駅で下車。待合室で野呂です。母が縫ってくれた大きな風呂敷を銘銘揚げ、持ってきた弁当で夕食し、夜を過ごしました。

九月八日朝、山陽本線の客車に乗車、すしづめで私達は荷物を下し、立ちどおし、広島駅で見た広島市は、見

渡す限り黒い焼野原でした。アメリカ軍が落とした原子爆弾、ピカドンのためです。投下された時のこと等々思い、世界から戦争は、なくなるのではと思つたのです。岡山駅に着くと、岡山市は米軍の焼夷弾のため、見渡す限り白い焼野原でした。

岡山駅で津山へ行く貨車に乗り、津山駅へ、津山からは姫新線の客車に乗り、腰かけて妹や弟たちは初めて見る日本の田園を車窓から見たのでした。勝間田駅では、引揚者は珍しいようで、駅員さんと色々お話し、やさしいねぎらいの言葉をいただきました。駅の待合室で、荷物を下して腰かけて休みました。私は長女ですから、弟、妹達を無事に帰国させることができ、つとめを果たすことができ、ほっとした待合室でした。

この道

岩本全子

パッ！パッ！とかすかな音がします。七月になると、夕方七時過ぎると月見草の花が開き始めます。今年はお家の前も裏山にも広がって咲いています。この花は今も亡き主人が四十年前前、津山から持ち帰ったものですが、今年はお家の周りをグルッと取り囲んで見事に花をつけています。私も年老いてきたので心配して守ってくれるのかとも思っています！

青葉の頃は昔よく遠足に行っていました。杉坂峠への道が大変美しく、この間に山田があり、かつては稲田でしたが、今はどこも荒れはててさみしい限りです。

昭和五十年頃は主人と運搬車に乗

って、よく田んぼに行ったものです。

忙しい田植え時にも、物語の主人公になったつもりで、まるで夢の馬車にでも乗ったように笑っていました。

今はあの頃よりも木々が伸びて深い深い森になっています。特に六月は七月はその色も濃くて、太陽は全然見えない神秘的な森の中を道が続いています。アケビもたくさん実をつけて、ぶらさがっています。その蒼さは見事です。

小鳥のさえずり、ずっと続く青葉のトンネルを二人で通ったこと、今でも脳裏に深く残っています。本当に「しあわせ」だったなあ！

今年も行って来ました。静かな空



間の中で、私のこれまでの人生を、ゆっくりふりかえってもみました。そこにはいつも主人が出てきます。新婚時代は大阪での楽しい年月でした。そして晩年は古里土居で充実した年月でした。これでよかったんだなあ！と思っています。それと共に感謝の気持ちでいっぱいです。身体に気をつけて楽しい人生を送りたいと思っています。青葉のトンネルの向うに何があるのでしょうか？眼を閉じると青葉で囲まれた長い道が続いています。

この道は私にとって幸せの道です。

三匹の子猫

井口祥子

六月の初めのある朝、朝食の用意をしていて、ふと窓の外を見ると排水口の穴から、もこもこ白、白、三毛と三匹の子猫が現われた。びっくりにして思わず、「かわいい子猫が三匹もいるよ。」と大声を張り上げると、夫が走って見にやってきました。

しばらくして白と黒の縞模様の「フジ」と呼んでいる隣の猫が「ミヤア、ミヤア」と特別な鳴き声をしてやって来た。オッパイをあげるとや合図らしい。この猫が母親猫。やせているのに、三匹の子猫は、母親にすがりつくようにしてぐいぐい飲む。乳を飲ませ終わると母猫は、子猫のそばにいないで隣の家へと帰っていく。

父親猫は、三月頃まで、我が家で餌をやっていた目が金目、青目のシロのようである。その猫は、私達にとでもなついていて足元に、もつれつくかわい雄猫だったが、用事で一日家を空けていた間に姿を消してしまったのである。

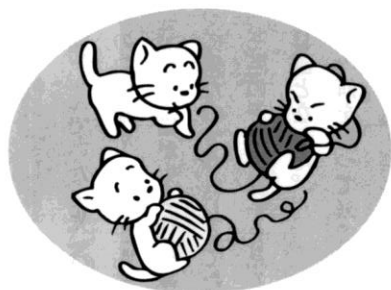
(どこへ行ってしまったのだらう。)と悲しんでいた矢先、シロとそっくりの白い猫が二匹と三毛猫が一匹の、三匹の子猫が生まれ、私達の前にやって来たのでうれしくてたまらない。三匹の子猫の様子を見るのが私達の日課となった。

子猫用の餌を買って来て、「シロ、シロ、ミケ」と呼んで餌をやるが、警

戒心が強く、姿が見えるとなかなか出て来ない。でも母猫の鳴き声がすると三匹とも飛び出て来る。

一ヶ月位たつと、だんだん行動範囲が広がり、高く積み上げた割木の山の上に寄り添っていたり、追いかけてこしたり、石垣をするすると下りたり、三匹はいつも一緒で、とても睦まじい。母猫も「ミヤア、ミヤア」と声かけしたり、毛並をととのえるかのようになめてやったり、子猫らが餌を食べている間、じっと見守ってやったり、とても慈しみ深い姿は微笑ましい。子猫のうち白猫は二匹いるが、一匹の白は、尻っぽが長く、もう一匹の白は、尻っぽが非常に短い。しかも餌の所へやって来るのはいつも三番目、そこでこの猫をサブと呼ぶことにした。シロ、サブ、ミケ

と呼ぶと、私の顔をじっと見つめるが、そばには来てくれない。フンをする時は、手で穴を掘り、フンをその穴にして土をこんもりかけ、丁寧に処理をする。だんだん自立し、大きく成長していく三匹の子猫がかわいくてたまらない。



るような仕掛けになって病人も寝たままでも大小便も取っていただき、三人程のヘルパーさんに宅まできていただき、よくしていただき、家の方の仕事も寝ている間にできました。今は、家の前の国道はトラックが絶えず通り、飛ばされそうで安心できません。車の事故が多く、横切るときは止まってくれる車もありますが、歩け歩けは体によいとはいっても、ゆっくりシルバーカーを押して歩く気分になれません。

朝起きし(シルバーカーで)散歩する

加藤 美雪

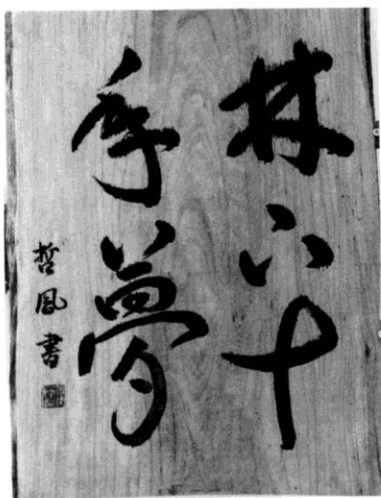
都会で育った私は七月五日で満九十三歳の年を迎えまして余り吃驚もしないし、右足の付け根を骨折しました。自転車にも乗ったこともなかったのにいただいた電動車のブレーキが反対でして壁の方へ上り、その

まま滑り落ちただけでもう歩くことができませんでした。実母は満九十九歳で眼を閉じました。その頃はヘルパーさんが家へ来てくださり、風呂も行水用の盥を持っていていただき、ベッドも起き上が

父の方は満八十八歳でしたが、母より先で、町の医師にかかりまして初めは通院しておりましたが、最後は先生宅の病室で、母と私が病室で寝て看護しました。先生も大きな病院へ行くまでに倒れられてもいけないのでとおっしゃいましたので見舞

うことにしました。とうとう最後「美雪」と私の名前を言っ息を引き取りました。私も実母の仲で年と共によくはならず、只今は原医院の続きに通所リハビリができましたので、もう週二日迎えに来てくださり、九年目になると思います。骨折のところは少しも痛くありませんが、外反母趾と言って、足親指が次の指の上のりかかり、両足がO型となり、先生の指導のもとで杖の高さを決めていただき、直角になるように突くよう守っております。

ローンが近いのでシルバーカーを押して行きますが、油断はできませんので心棒が大切だと思います。それから、早朝の空気は体によいのでシルバーカーで頑張っ実行するようにしております。



書道 久安哲男

歴史紀行

大きなできごと

些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなつて

伝えよう



生花 加藤玲子

春日大明神へ後醍醐帝行幸

原 利 保

元弘二年（一三三二）三月七日の巳

ノ刻（十時）後醍醐天皇（四十四歳）

は隠岐へ遠流のため京を旅立たれた。

警固するのは千葉ノ介貞胤・小山

五郎左衛門・佐々木入道道誉を大

将とする五百の精兵である。扈從す

るのは一条行房・千種忠顕の二人

の公卿と阿野廉子・権大納言ノ局・

小宰相の三人の女御たちである。

山陽道から播磨道へと入られて佐

用の宿を出駕される時の警固役の

道誉（近江の守護・婆娑羅大名）は、

帝の側近く接している間に次第に

帝の人柄に魅せられて心を打ち解け

ていたので「美作ノ国粟井郷に春日

大明神と申す古社があり、昔皇位の

危機を救った和氣清麻呂の子孫が勸

請したもので行幸なされてはどう

ですか」とはなしかけた。

帝は「そのような古社があるのか、

是非参詣して故事に肖りたい」と仰

せられた。道誉は早速、先触の使者を

粟井郷に向けさせた。使者は四十歳

ぐらいの土地勘のある者で内容は次

のようなことであった。

○五六三年前皇統の継承の危機を

救った和氣氏が、勸請した春日大

明神に行幸なされ、清麻呂の如き

忠臣が出現して帝を救出してくれ

ることを祈願される。

○御食は不要であるが、休息のため

に腰掛用の石と湯茶を所望されて

いる。

○案内人を藤生の渡りに待機させて

おくこと。

○郷民拳つてお迎えすること。

使者に応接した時の粟井郷主廣岡

氏は急遽郷民に指示して春日神社

一帯と遷幸路の清掃・整備にとりか

かる。特に宮ノ谷と奥瀬戸の間は山

坂の難所難路である。男の大半を当

て、道幅を広げたり草木の根を取り

除き、岩石の除去につとめる。どうに

か仕事が終わったのは帝が着駕さ

れる一刻ほど前だった。

遷幸の一行は無事杉坂を越えられ、

藤生の吉野川を渡られた。ここで秀

朝・貞胤に所属する兵士はそのまま

西進して南海を越え、樞原を通り、

院庄を目指す。

帝の一行は、ここ藤生で主力隊と

分かれて粟井郷春日神社に行幸するために北進されることとなった。

道誉は分かれ際に秀朝・貞胤に「西に進むと大川（梶並川）に突き当たる。その手前に檜原火ノ神と言所（笠懸の森）がある。そこで帝の一行が帰って来るまで待つておれ」と厳命した。

北進して粟井郷に到る道は難渋が充分予想された。案内人を先頭に徒歩の道誉と馬、続いて一条・千種の公卿、その後帝駕（前四人・後四人輿丁）付き添う女御の三人、その後に道誉の郎党二十人ばかり、殿は荷雑人の小勢力である。

芦河内・口瀬戸と進まれて、いよいよ奥瀬戸より宮ノ谷への難路にさしかかった。

粟井郷民が総出で整備したとはい

え難所には変わりはない。上り坂の時は輿の前輿丁は担ぎ棒を手で下げ後輿丁は担ぎ棒を両手でさし上げる。下り坂はその反対動作をして帝に負担をかけないようにつとめた。

郷民総出でお迎えする中を春日神社に到着されたのは三月十六日未ノ刻（午後二時）かと思われる。典侍の阿野廉子のさし出した沓をお履きになり、神前に深々と拝礼され、一心に祈願された。帝は巨擘で漆黒の帝冠、豊かなあご鬚、淡紅色の襟、鶯色の直衣、紅色の指貫を着用されていた。帝が隠岐に流配されることなど全く知らない郷民は、道端に跪き、神々しいお姿を遠目に拝した。

やがて神前を退出される時、郷民が用意していた布をかけた石に腰を降ろされ、忠頭が差し出す湯茶を召

し上がられ、一度境内を見廻された後、入輿なされた。扈從して来た一行の者に郷民が大釜で用意した湯茶を差し出した。

半刻たらずのわずかで発駕する帝が、どうして山家の中の山家の神社に行幸されたのか、その由も知らない郷民は感涙にむせび、嗚咽しながらお見送りました。

帝駕は馬形・四辻・広山を進み秀朝、貞胤の本体の待った檜原火ノ神（笠懸の森）に到着され、合流し、院庄に向かわれた。

三月十七日院庄に着駕されたが、帝は長旅のためかご不例（お疲れ）で二・三日逗留し、養生されて、美保関を目ざして発駕された。

このように伝承されている。
千時 平成二十二年庚寅十月穀日

江見の八十五年の歴史と共に

野村勝志

バレンタインパーク住宅前から望む江見盆地は美しい。中世より交通の要衝杉坂より後醍醐天皇ご遷幸の王道の道、出雲街道、倉敷（林野）―古町街道備前に通ずる道もあつたと伝えられる。この地に生を享けて八十五年、江見にも栄枯盛衰の歴史があり、往時に思い馳せる。

姫新線の工事と開通、町制施行、日東製糸が片倉製糸工場となり大繁栄。街に活気ありて賑わし時もあるが、大戦、そして戦後の物資乏しく、食糧難、町村合併、中国道の開通、国道一七九号線、藤生バイパスなどの開通、江見商業高等学校の開校そして廃校す。バレンタインパークのある所、村

人讚華寺山と愛称し、頂上に愛宕権現を祀り、春は花見、秋は愛宕祭り、また子供の頃は遊び場、長じては村人と共に開墾、桃畑となる。連なる山に我が山ありて中の草刈薪こり植林をする。時は流れて高かき山低き谷に埋め、現在のバレンタインパークとなる。

太古より悠久に流れる吉野川、瀬あり、淀あり、大岩あり、大木ありしが防災整備され、一大水路と化し、架る橋も旧大還橋一橋あるのみが、吉田―藤生の二橋、川崎―藤生の二橋、中国道鉄橋、大還橋、旧大還橋、美原橋、観音橋の十橋となる。山家川は河川拡幅して立派な新橋が架る。

江見小学校、川崎に移りて久しい。私の学びし小学校講堂、正面、神聖な所、天皇のご真影をまつり、勅語場所、右側には五・一五事件に暗殺された首相、大養毅の書「知行並進」の額あり、左側には昭和十四年の首相、平沼騏一郎の書「敬愛」の額あつた。

今春「老健」に行きし時、片隅に旧校門と大養毅の書をほりたる大石が横たえり。私の座右の銘であつたこともある。感動する私にとって大発見である。この二書の本書いずこにあるだろうか。

姫新線 発破工事の 土けむり
目に焼きついて 八十年



尋常高等小学校 野村勝志
江見小学校 校歌

一番には記憶ありますが、二番、三番は片山武範氏の覚えです。

一 山紫に那岐はれて

遠く真北の空に立つ

水明らかに吉野川

村をめぐりて行くところ

おおうるわしの我が郷土

二 遷幸待ちえし杉坂の

歴史にも著るく芳わしき

芳英校の名に負える

たかき精神を受けて来し

あななつかしの我が校舎

三 ゆるぎたえせぬ山川の

郷土に生い立つ我等こそ

畏き啓示仰ぎつつ

いそしめはげめたゆみなく

おお名を揚げん我が江見校



昭和24年の6月頃 水田に水張りたる



現在の姿 バレンタインホテル屋上より

「武蔵」ゆかり事蹟・府県間の交流連帯の完成いま喫緊

加藤芳英・春名倫子・安東奈穂子

武蔵生誕は備中高松城水攻めの年

宮本武蔵(一五八二〜一六四五年)は「数え年」で言うくと六十四歳で、この世を去ったそうだ。

武蔵生誕は天正十年。本能寺の変・備中高松城水攻め・中国大返し・秀吉覇権の年と同じだと言う。

NHK大河ドラマ放映は、「宮本武蔵」が平成十五年。今年、平成二十六年は「軍師官兵衛」。平成二十七年には吉田松蔭と門下志士を中心に明治維新放映と続く。史蹟旅行が広がる。

【播州米田生誕地説】では、武蔵は米田(米墮)―高砂市―の、田原家貞の次男として誕生し、九歳にして作州宮本の養父、新免無二(無二齋)の

下へ。無二は、室町幕府最後の將軍義昭に召され、將軍の師範、扶桑第一の兵術者とほめられた「十手術の名手」だった。

武蔵は、当理流劍術などを修業し、十三歳・十六歳で勝負をし、十九歳の時には「九州で養父無二と東軍黒田官兵衛勢で合戦した。(九州西軍方の城攻め)

二十九歳で「巖流・小次郎との勝負に勝つ。

三十四歳の時、大阪夏の陣(一六一五年)では養父新免無二も武蔵も黒田家に仕えていたので徳川譜代大名の下で参戦。美作竹山城主・新免宗貫も黒田家に仕えている。

武蔵四十五歳の時、武蔵は明石・小笠原家の客分となり、甥で養子となった伊織も小笠原家に出仕し、次の年に「家老」となっている。

五十一歳の時、小笠原家が小倉に移封、伊織とともに移動した。(黒田家のあとへ)

五十八歳の時、熊本細川家の客分となり、数え年六十二歳〜六十四歳の時、「五輪書」を残して死去。

(右は魚住孝至著「宮本武蔵 五輪書」より抜粋)

【作州宮本生誕地説】等々では、劍聖宮本武蔵は天正十二年(一五八四)に生誕。(新免無二の実子として)郷土の誇りとして古くから語り伝えられてきた。

特に明治後期以降、郷土史家や剣道家等によって顕彰が進められた。

昭和十四年、昭和十八年に吉川英治の「宮本武蔵」が朝日新聞に連載。

小説準備中の吉川英治が昭和十二年六月二十七日、讃甘小学校で記念講演した。不朽の名作「宮本武蔵」によって、一躍日本の、いや世界の宮本武蔵となったと、「武蔵の里めぐり」チラシ(平成二十五年)に書かれている。

バラ撒かれた「美作出生説」の

影響は大

吉川英治の「宮本武蔵」が朝日新聞に連載された時期は、日中戦争が膠着し、昭和十六年「真珠湾攻撃」。「鬼畜米英」、「撃ちてしまん」、「欲しがりません勝つ迄は」の国民総動員と時期が重なっていた。

武蔵の必殺二刀流も戦意向上に利用される。広島・長崎の原爆投下、

敗戦。戦後もよく読まれた。

作家吉川英治は、武蔵が「幼友達の本位田又八とともに関ヶ原の戦いに参加して敗れ、人間の小ささを知り、沢庵和尚下で修業したり、お通との恋愛に迷ったり…」とか、面白くするための造作・架空性充分の創作をした。関ヶ原の戦いには、新免無二も武蔵も不参加。豊前中津領主・黒田如水に従って、九州に於て東軍方黒田勢にて、九州の西軍方の城攻めをしている。

吉川英治や、司馬遼太郎等が自らの小説で全国にバラ撒いた「武蔵美作出生説」が根強く残っている。

(吉川英治が小説創作に参考にした主な資料は①「熊本武蔵遺蹟顕彰会」が明治四十二年に編集した「宮本武蔵」と②武蔵門系の子孫・豊田景家

の「二天記」「三八年前」という。「五輪書」は第一次的一級資料だ

熊本・細川藩が産んだ

「武蔵 五輪書」

武蔵が、熊本藩主・細川忠利の客分となったのは一六四〇年だった。熊本市の靈巖堂にて一六四三年から「地・水・火・風・空」の五巻構成の「五輪書」を起筆。一六四四年に病気になり熊本城下に戻り、一六四五年に没した。

武蔵の墓は、遺言によって、細川家代々藩主が参勤交代で通過する大津街道沿いの武蔵塚だ。報恩の念のあつい人物という。

武蔵は「播磨の英産」を尊重すべし
武蔵に生誕地が二ヶ所以上あることは絶対であり得ないことだ。

武蔵は、序文の冒頭「天を拝し、観

音を礼し、仏前にむかひ、生国播磨の武士新免武蔵守藤原の玄信、年積もつて六十」と記す。まさに本人が生前に残した第一次的一級資料で、生国播磨を疑ってはならないと思う。

武蔵死後八年に、伊織が生地播磨の泊神社の棟札に「作州頭氏神免を武蔵が継いだ」と記す。

その翌年に伊織が建立した「小倉碑文」の詳しい文の最初に「武蔵は播磨の英産、赤松の末葉、新免の後裔」と記した。(一次資料)

その他の伊織直系資料でも、武蔵が田原家の出で米墮村が生誕地と記している。(国際武道大学教授魚住孝至氏調べ)

生誕地間で相手の僅かな誤り、不完全をつつくのは止めた方がよいと思う。美作宮本説側は「出身地・成

(生)育地・出生地」など適切な言葉を相談して選び、米田側の「生誕地」と重複しない。気くばりをして交流する姿勢が重要と思う。

武蔵の思想追究し、広げ易い工夫を「五輪書」等は「求道」の手の一つと言われる。私どもは浅学の故、「日本名言名句辞典」(小学館)から左の六句を紹介したい。学校教育、社会教育に役立つと思う。

▼一人の敵に自由に勝時は、世界の人に皆勝也。(地の巻)
▼兵法勝負の道におゐては、何事も先手先手と心懸くる事也。(風の巻)
▼心の内濁らず、広くして、広き所へ智慧を置くべき也。

▼いづれの道にも、わかれをかなしまず。

▼老年に財宝所領もちゆる心無し。
▼我が事におゐて後悔をせず。
テレビ、ビデオ、マンガ等々で宣伝に工夫を。

武蔵は生涯中、

どの府県に多く居たか

編著 魚住孝至(一九五三年兵庫県生れ)

▼岩波新書「宮本武蔵」(平成二十年発行)

▼角川学芸出版「宮本武蔵 五輪書」(平成二十四年)付属の(武蔵生涯年表)から、私どもが計算して左の結果を得た。(凡そ、の数値と思っ てほしい。武蔵の足掛け六十四歳の生涯を一〇〇%とする)

▼「九州」十八年(二八%)

▼「幡州」二十五年(三九%)

▼「美作」八年(二三%)

▼「京都」四年（六％）
▼「その他」十年（二四％）
美作宮本生誕地説で計算しても「美作」十三年（二七％）と生涯の三分の一以下だ。

伊原木岡山県知事、萩原美作市長をはじめとする関係当局責任者をお願いする。隣の兵庫県、熊本県（細川家を含む）、福岡県、大分県、京都府、大阪府などの関係当局責任者と交流・連帯の完成めざした対話・対策を打ち出されるよう期待する。

積み残しの宿題・留意点を二つ紹介
▼平成十五年の大河ドラマ「武蔵」の年には「大原」などへ参観客は約十万人（二日平均三千人、観光バス百台）だったが、平成二十四年頃には一日約二十人に落ち込んだ。平成十七年に「岡山国体の剣道全

国大会」が実施されたこともあって、石井前岡山県知事の時から、国道・県道の諸所に、案内標識「宮本武蔵生誕地↑」が十数年間も放置されている。武蔵の生誕地が二ヶ所以上あっては不条理だ。岡山県はこの点からも兵庫県と話し合ってほしい。

▼平成二年に細川家十七代当主・細川護貞氏が「作州大原の生誕地」には、父（護成）の署名があるが、私はその誤りを正すため、高砂の地で題字を書き、署名した」と発表されていることも留意し、第十八代当主・護熙氏（元首相）らの智慧を引出して行かれることを期待する。

（追記）
武蔵死後百年に、播州国印南郡平津村居住の医師・平野庸脩ようしゅうが記述

した「播磨鏡」の中に「宮本武蔵揖東郡いかるが鶴ノ荘、宮本の産也」とある。よって、今のところ兵庫県内に武蔵の有力な出生地が二ヶ所あり。（揖東郡鶴ノ荘宮本は、現在の兵庫県揖保郡太子町宮本）



ちぎり絵 保利幸子

短文芸

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力



写真 小坂田 貢

俳句

うつろひ

春名はるを

老鶯の声に貫禄ありにけり
夕菅ゆすげの花に重なる伊予緋
颯風を大風呂敷に召し取らむ
極楽の入口探す紅葉寺
別れ霜踏みてかけだすランドセル

風やさし

杉本幸子(土居)

蓬摘む頬を撫でゆく風やさし
夕迫まり虫の音次第に高くなり
紙ひこうき飛ばしたくなる五月晴れ
熱中症点滴されし日半夏生
倉のまちいけめん俵夫や光る汗



洋画 青山 巖

四季折々

山本靖子

遅霜を越えて鉄音高くなり
露味噌の香り味わう夫婦膳
横顔をやさしく撫でる若葉風
送り火の煙に浮ぶ母の顔
日焼けした我が皺しぼの手に過ぎし日々

里山を思う

青山美和子

昇る陽にキラリ輝く柿若葉
花冷に又も取り出す冬衣
葉桜を影に語らう老二人
草むしり小さき二葉氣づかつて
垣根越しひとときわ目立つ濃紫陽花

四季

真野雅子

花の雨受ける傘にも軽やかに
草山に群れて匂の笹百合かな
名月や山より登る勇ましき
一人居の遅い夕餉の大根汁
日めくりの薄うすさいらいら師走かな

冬帽子

高橋やえ子

馴染みたる夫のお古の冬帽子
初鏡買ひ立ての紅そつと引く
タカノツメ干す雪中に紅散す
番号で呼ばれし診察桃の花
晴れ上る霧の中よりポプラ立つ

燕くる

福嶋 多斐子

酒倉は閉ぢたるままに燕くる
サツカーに胸熱くして笹の秋
散歩道青田と共に吹かれをり
単線は銀杏したたる寺の下
夕映えの古き家並を秋渡る

心無に

沖田 はるみ

心無に二礼二拍手年あらた
舞ひ疲れ蝶憩ひをり荒神祠
稲妻やふと扉の緩ぶ天神祠
戯れて箒離さぬ境内もみぢ
稲荷社の陶の小狐冬うらら

紫陽花

樽井 清江

舞い上がる花の吹雪の中に立つ
にぎわいて稚鮎放流みな笑顔
紫陽花の色に染まりし雨の音
朝露に力をもらう野辺の花
うめつくす主なき館 蔦紅葉



作東中学校

宝物

豊田 絢子

山里の宝物なり夏の星
稲穂上へに足跡つけて風過ぐる
ころころと風の吹くまま芋の露
音もなく背にしがみつく冬の暮
つれなしや大地の溜息霜の果て

ほたる

森本 久子

もみじの手孫からもらう夜光虫
青葉かげ走る救急車に足ふるう
夕暮のひととき惜しい麦の秋
月あかり花火あがれば急ぎ足
村は田植国道を走るは救急車

草取り

井口 祥子

草取りの友は一人影法師
新樹晴れ親子手つなぎ靴がなる
三匹の子猫じゃれ合う紫陽花下
神宿る梅の実一つ手の平に
鎌の先危機一髪の蛙かな

パースにて

下山 紀子

サンガラスかけて異国の土を踏む
手に残る抱きしコアラのぬくもりが
夏帽子夕日大きなインド洋
髪洗ふ旅の終りのパースにて
異国の地踏みし白靴磨きをり



日本画 草野昭子

川柳

老おいて

樽井悦子

老おいてまだ文書きすると笑われぬ
いつまでも若くいたいと杖もたず
風薫る海辺歩き靴ぬぎぬ
素足にて海辺の匂い持ち帰る
風強し我が荒屋の無事祈り

脱原発

山下照夫

原発は止めてしまえと声高に
不自由でも死ぬよりましぞ反原発
福島を未処理のまままで再稼動
今日のつけ子々孫々にのしかかり
福島は他人ごとならず我身とも

亡おき母

加藤美雪

紫陽花や小さき花が毬まになり
鉢植えの苺熟れば曾孫とり
年取りて車のおかげりハビりに
庭の草一雨降りて草むしり
粉種を手振りよく播く亡おき母や

花吹雪

樽井悦子

花吹雪舞つて止まりし髪かざり
花吹雪舞いつつ流れ花笈
蜘蛛の糸頭にかかり朝の庭
麦畑飛び立つ小鳥羽根をどる
旅の空輝やき続けよ夜の星



作東中学校



江見小学校

野の暮らし

太田 智子

診察カードでふくれる老の空財布
足跡も残さぬ道で汗流す
七年と七日の命聞く木陰
秋冷の野に立つ女一人旅
お疲れさま夕陽と交わす野の暮らし

折にふれ

衣笠 隼巳

欲張ってまた食べ残すバイキング
食い違い解けぬパズルの国境
四十度いよいよ日本亜熱帯
親馬鹿を一緒に詰める宅急便
疲れても苦にはならない孫の世話

孫

山本 昌子

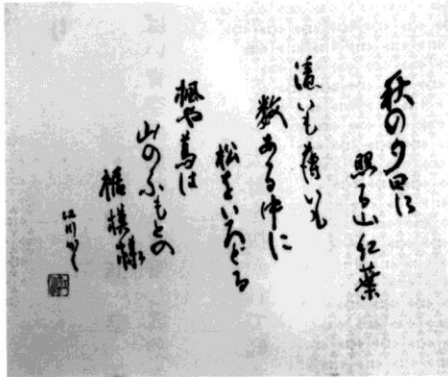
喜寿過ぎてまさか孫守り日課とは
歩む孫見ると命惜しくなり
お里から孫のお尻に似た桃が
孫がいる破れ障子にある温み
外孫は猫の名前で呼ばれがち

夫婦

原 洋一

騙したのはそっちと笑い合った頃
近くにも遠くにもなる車間距離
少し欠けた夫婦茶碗が手に馴染む
勲章だと思ふ夫婦の修羅の痕
二人三脚くくり直して夫婦旅

短歌



書道 石岡和江

さくら

井上 さかゑ

満開のさくらに青空広がりて土竜おどしがからか
らと鳴る
耕して施肥する畑よ花日和りさかる桜を遠く愛で
つつ

並びゆく粟井つ児の列も今年かぎり校庭のさくら
咲け咲きつくせ

春近し

安東 奈穂子

幾度も水車の歌を読み返す水車の杵の音懐かしく
一人居て誰とも話すことなきに冬枯の庭は静かに
輝く
そこまでも来てゐる春の輝きよ遠き友との約束待
つに

雲動きおり

加藤 幸子

病室の大窓いっぱい青空の見ゆるは嬉し雲動きお
り
今日からは点滴が無いよと太針を抜かれて軽くス
トレッチする
吸引器具効力見えずと外されてそれでも心身軽く
なりたり

生きる

松本 哲夫

永年を苦勞し作りし水田も洪水防ぐ堤防と化す
待ち待ちし喜びの声ぞ曾孫生れ受話器の向かうに
聞こゆる泣き声
八十路越え我が人生を振り返る苦樂もありしがな
ほ生きむとす

吾が人生

新免 初子

農に生き八十八歳草引けと畠が呼ぶか今日も地下
足袋
馳せ行くに酸素マスクの義兄の面洩れくる息に近
き死を知る
これ程に長らふるは思はぬに腰も屈りぬ曾孫も七
人

独り居

山下 光子

戦の最中嫁し来て七十年越し方の悲喜諸諸が今独
り居の杖
之という物想う事無き吾が気付けば脳にて歌唱い
おり
卒寿吾なお物忘れ多あるに幼少時期がまざまざ
浮かぶ

花一輪

福嶋 多斐子

花一輪古木に添へて窓開き始まる今日の息深く吸
ふ
時鳥深夜に鳴くをまねてみて本屋大賞読みつづけ
たり
雲飛んで次の季節の予感する空のまん中あきあか
ね濃く

「勝田」周辺の大気も清けく

加藤 芳英

杉原の「クリーンセンター」にて市民らの交流な
さば清けくなるらむ
紅に薄紅に白に花桃が天に向き伸び並びて御座る
広島と長崎平和大会に「戦勝国」も黙禱参拝あり
て然り

農を愉しむ

山下 三代子

J Aより馬鈴薯の種薯届きたり春はそこまで訪れ
をりて
野菜作りに健康願ふ日々にして鹿は初仕事と大根
を食ふ
白菜の今年も固く結球し宅急便にて娘に送る我



土居小学校

折々に

杉本幸子(土居)

白南天鶴より先に取らねばと見れば今年も全部食べらる
ハクピシンに鉢植いちごを食べられて調べてみれば大好物なり
あしたこそ明日こそやらねばと想いつつ今日も暮れたり足腰痛さに

一人見て居り

森本久子

日が昇り南天つえばむ小雀を一人見て居り気付く
気配なく
我が家に来て遊びある初つばめ手のひらに置きかはいがりてみたし
散る花を見し蝶蝶が次次とおくれたんぼの花にとまりぬ

友情

名部みどり

対向車のライトが「お知らせ点滅」す友情明るしまひるの国道
城跡の樹林よりまるく白い月春待つ夜霧に見えかくれしつ
風一陣散る花児達が追ひゆくにひとひらきままに樹間をさまよふ

栗井の村

安西苑

嫁して五十年栗井の村に春たけて能登香の木木は芽ぶきゆくなり
はつ夏の光さしくる里山ようつぎの木木に白き花咲く
夕光に静かに開く月見草我が村の野にひつそりと咲く

曾孫

光井房子

姉兄のすることは自分も出来るかと岸よりとびおける二歳の度胸
お父さんお母さんと呼ばせ育つ子もパバママとも呼ぶ保育園になれ
自転車の練習はじめて二日で乗りだす曾孫五歳の努力の技や

老

藤川亜也

菜園は余生の楽園鋤持てば刃先にきらりと朝日が光る
何事も気儘に出来る身となりて淋しさもあり楽しさもあり
耳遠くなりて不自由となりたれば聞きとれぬ事は笑顔で頷く

折々に

原幸子

ケキヨケキヨの声に引かれて山畑のわらび折りたり一握りほど
姫ほたる今宵も見たり溝の辺にゆつくりほろりと逢ふせを楽しみ
黄の菊の花に酔ひしやきりぎりす数日そこを宿となしをり

曾孫

清田三智子

二歳児の曾孫はお墓におやつを置き手をば合はせて目をとちをりぬ
夏祭り歌にさそはれ曾孫連れ出づれば夜空に花火が上がる
曾孫は負けずおとらず大きくなりてお年玉だけをもらひにくるか

春を待つ

大内 佐智

春来るを華やきてみる夢の中四季ある事の不思議
さにあり
雪晴れに小鳥のさへづる声すれば冬ごもりの我腰
をあげてみる
雪重しさのトンネル続く道童話の小人飛び出づ
るやも

老ゆる

名部 通子

目覚めては眠れぬままに過ぎ来しに思ひ巡らす二
時三時四時
飲み薬と塗ったり貼ったり差したりのおかげか今
日も生かされてをり
あちこちに手摺はつきて段差とれ便利のうらで知
る深き老い

老いゆく我か

藤本 伸子

家つき子が嫁の座もなし姑の座もなしゆるやかに
老いゆく我か
田の畔に身をそり上げるねぢりばな小さく可憐な
ピンクを咲かせて
亡き母の齢となりて古稀近し夢に見る母いとうつ
くしき



作東中学校

能登香の湯

内藤 慶子

休みなく能登香の湯へと通ひ来る笑顔の媪九十七
歳
能登香の湯飛び交ふ声の響きつつ湯煙まとひて飾
り気なき人
神戸から温泉めぐりに来ましたと熟年夫婦が能登
香の里へ

鶯

原田 順子

片言を言ふがに聞こゆる鶯のかはゆくもありをか
しくもあり
子に見本示すが如く鶯は高くも細くもピブラート
に鳴く
あの藪の深みに鳴くかや鶯が繰り返し鳴く聞けと
ばかりに

過疎の村にて

松井 洋子

空き家増え墓守りは来ず草刈りは居残る夫の仕事
となり来ぬ
鹿どもが早苗を食べて濃淡のまだら模様を見せを
る田圃
「田圃めがあるばかりに苦勞する」と翁は言ふ
に頷く周囲

娘との旅

有元 理嘉子

剣山越ゆれば祖谷のかづら橋渡りてみたきに足の
竦み来
青空に若葉のゆるるかづら橋渡り切りたり祖谷の
つり橋
この旅が最後の旅になるかと思ひよぎりぬ又ね
と言ひつつ

墓地の草引き

横山 美恵子

「母さんの一生綴れば小説」と子は言ひ呉れぬ戦時中の体験語る人減りて話して解るはリハピリの友
終戦を語りし父母も夫も逝き残りし我は墓地の草を引く

ばかり

小林 洋子

同窓会目も齒も耳も補ひて喋るばかりに食は二の次ぎ
道の辺に子猪二頭の倒るるを叫ばむばかりに女孫は告げ来る
これ位なせると思ひいざなせば三鍬も続かず腰伸すばかり

いまだ途中

新免 三代

ふくらみもし固まりもするわが思ひ全部を抱きて泣く日の多かりき
おぞましく過ぎ来しわれはアクセルを踏みつつ声に無事故で帰るぞと
喜寿とでもいまだ途中よ平均寿命は彼方の事よ要は心よ



江見小学校

明けのかなかな

加百 由起子

凍て空を切るがに飛べる鶴の今年はほとんどその姿みず
深皺のことさら顔になじみ来て七十代の坂また一つ登る
よべ逝きし媪を悼むかわが村を鎮めて鳴ける明けのかなかな

旅

豊田 絢子

山深き皿山地区に今もなほ小鹿田焼きあり手仕事守ると
茜さす夕日の光を背に受けて隠岐の八百杉宙に立ちたり
謂れ秘め座する万治の石仏に木の葉雨降る音たてて降る

新年の朝

新田 千晶

しらじらと明るむ空と対峙する物干し終へて新年の朝を
千年の我は運にもうまく乗り短歌もうまく上手くなりたし
元旦の明けゆく空を見上げては今年も願ふ転ばぬようにと

追悼

黒石 初江

子どもらに読みきかせしし保子さん幼き心に残せるは何
「粟井小」の子らを愛する歌を詠み優しく見をりし保子さん逝けり
去年の秋病と闘ふ貌見せし友は逝きたり歌を残して

ごうろ山

末宗 玲子

「ごうろ山」の表記を皆で論議する「郷路」か「豪路」か「五郎山」かと
我が家から見ゆる「ごうろ」は三輪山を小さくせしがに姿佳き山
「ごうろ山」に霞の雲の棚引きて風やはらかき立春の朝

わが母

船曳 文子

リアカーに病む父乗せて川島の桜の土手を歩みしよ母は
病得て母の年忌に不参加よ痛みこらへて梅雨空を見る
百二歳の母が歌ひしローレイ孫・子集ひて墓前に歌ふ

体の記憶

丘野 道子

屋根を打つ激しき雨に過ぎし日の事々重ねて今もをのく
二時十分揺れを感じて身構へぬ神戸の記憶未だ消えずに
遠吠えを恐れて我にしがみつくと幼児論しつと抱ける腕かひな

母の日

加藤 保子

連休に娘のくれしカーネーションは見事に咲きて今日は母の日
藤の花枝垂れて咲ける山裾を一両電車ゆらしつつ過ぐ
湧き水の細く流るる山の道沢蟹ひとつ爪立てて這ふ

声ヶ札

角 利津

新しき空気を求めて那岐山麓に空気の如き夫と来にけり
何の声ゆゑに名付けし「声ヶ札」風の木霊かはたうぐひすか
柚人の呼び慣はしし「声ヶ札」声を限りに鶯の鳴く

折りをりに

中川 富美枝

白波を残して行くは釣船か明けゆく瀬戸の内海静かに
ひそやかにそつと抱きてだきしめて仕舞ひおきたし今宵の名月
那岐の峰をはるかに望みて歩み来ぬ曇る日もあり晴るる日もありて

甦りたり

北村 和子

年老いし我を優しく診察するいけ面医師は孫程の歳か
医師の呼ぶ声遠くより近くなりてわれ現世に甦りたり
玄関に戻り来たれば二十日前に我の活けし花いきいきとあり

ウォーキング

角 南 三津糸

歩き来る人は彼女やすれ違ふ今日の匂ひはラベンダーなり
「さよなら」と言葉交はず別れ行くゆきずりの人は誰も無口で
今日も又一人のリズムで土手を行く「夕空晴れて秋風吹く」と

栗倉の郷

森 佳奈

おとなひし「旬の里」明かり賑はひてバイキング
満席の一人となれる

山を抜けて「急行白兔」ゆくみんなの望みと夢
を載せぬて

川沿ひに巡らす回廊の緑冴えせせらぎの音に我を
弛ばす

暮らす

黒石 登代

離り住む子等の言ふなり「頼むから無理せず事な
く暮らしてほしい」と

突然の娘の死去は今までの生き来し中の最たる悲
しみ

「元氣かいそれならいい」とそれだけで今日も息
子の「携帯」切れる

ぬくき光かひ

長澤 和枝

かど先の柿の若葉が風ふくみ光ふくむがに耀ひて
をり

黒豆飯を仏に供へわれも食べ軒下ぬくく豆たたき
をり

夕焼が川面を染むるたまゆらの光にてわれも包ま
れてをり



作東中学校

夫と子

福 島 美智子

南天の赤き実の房重おもと奇異に少なきひよどり
のこゑ

おとがひの髭を剃りをり夫と子は時間の長短それ
ぞれに持ち

飼ひ猫の捕りし小鳥を松の根に埋むる元旦空気さ
やけし

巢

日 下 智加枝

飛びゆきし跡に残れる野鳩の巢が日に乾きをり作
りかけのままに

芽吹き近きメタセコイアの高処には巢が見えてあ
て鴉が入りす

出入りしてゐるのは雀よつばくろの古巢を借ると
は「おぬしもなかなか」

音が聞こえる

入 矢 敏 江

意外にも春來峠は明るくてあまた家ありバス停も
ある

生まるるも死にゆくも独りと思へども純孝は逝く
ただ独りにて

木々の間に寄せくる白き波が見えまた波が見え音
が聞こえる

ミルクの香り

浜 田 くに子

甘やかなるミルクの香りに満ちてをり息子の家の
玄関に入れば

スカートと揃ひの生地にてベスト縫ひプログのタ
イトルは「ママと僕の服」

父親となりて初めての誕生日が良い日だったと子
よりのメール

文化協会部活動 グループ紹介

グループ活動
それは
作東の文化の底力！



文化誌編集委員会

山繭

坂井 はつ子

山繭のうすきみどりの輝くか裏山の楢の繁みに
天蚕は繭を破りて発ちにけりいづくの空に宿りせ
むとや
秋の灯に誘はれ来たる山繭の障子に生める卵やい
くつ

負けられん

三浦 智江子

今どきの子供といへども 八歳を本気で叱り泣か
せて去なしめつ
おばあちゃん恕ゆるしてあげる。叱られて二週間のち
電話かける
おぢいちゃんはパラッチやと言はれをり落葉蹴
りけり冬枯れの杜

醜

関内 惇

啄むに餌のどを喉のどに詰つまらせて首を振り振る白鷺の醜
山茶花の花びら散れるを掃き集む終の醜をば集む
るがにも
夕闇はいと深う村を包みきぬ老いらの醜を隠さむ
としてや

粟井小学校に寄せて（遺作）

池田 保子

組体操「ふるさと粟井」の全児童為せば成るもの
堂々の演技
地区民の熱き声援に応ふるごとみんなが主役の粟
井小運動会
師と見らで奏づる演奏潑刺と粟井校の絆つたはり
て来ぬ

白雲書道会

私たちは里見明（孤舟）主宰の会です。会員は三十四名で市内二十名、市外十四名です。教室は、中央公民館、林野、湯郷、先生宅で行っています。

先生は流派にとらわれない自由な書体で手本を書かれ、八十八歳とは思えない元気な字を書かれています。毎年九月開催の「白雲書道会展」を励みに会員一同、書の上達を願い、研鑽したいと思っています。



書・春名

○指導者 春名直子
 ○受講生 約二十二名（高校生以下含む）
 ○開催日 月曜日 高本コミュニティ 五時～ 月三回
 木曜日 角南公会堂 六時～ 月三回
 金曜日 西町隣保館 六時～ 月三回

小学生から成人まで、各個人の必要に応じて書の基本から漢字、仮名はもちろん創作（作品づくり）の方法、篆刻（印をほること）まで幅広く学べます。



阿部書道会

○代表者 真野 みよ子
 ○会員数 四名
 ○例会 月四回（日曜日）

昭和六十一年、阿部雲魚先生が岡山へ転居され、川崎塾をまかされました。先生をお慕いし、仲間と一緒に岡山へ長年通いました。現在は会員も激減し、四名です。（先生は百二歳を迎え、お元気で）

文化協会に加入し、見聞を広め、他分野からもよい刺激をいただき、それが作品づくりの糧になります。ではないかと励んでいます。



作東絵画教室

○代表者 小林 道幸
 ○指導者 竹中 信清
 ○人数 油彩教室十五名、水彩教室十三名

講座実施日 油彩第一・第三土曜日、水彩第四土曜日
 会場は、農村環境改善センターで描いています。会員の中には津山や佐用から来ている方もあり、和気あいあい楽しい教室です。

年一回、五月に春の絵画展を開催し、作東の文化展や公募展等に出品するなど頑張っています。



土居すみ絵会

○指導者 岩本敏子

○会員数 六名

○開催日 月二回 第一、第三火曜日

J A勝英土居支所

人数は余り多くはありませんが、みんな楽しく、時にはお茶を呑み、おしゃべりもして頑張っております。また、人数が増えれば、ますます楽しくできるのですが…。

また、機会がある時は、他の先生方の発表会を見学に出かけています。バレンタインプラザ等、展示もしています。



彩の会

○代表者 木南節子

○グループ員数 四名

最初は、須田洋子先生のご指導を受け、絵がみを知りました。現在は、教室・グループという形ではなく、それぞれに自宅等で楽しんでいます。

時には、集会所に集まります。

文化展・郵便局に展示させていただき、励みになっています。

絵てがみの魅力は、一人でも楽しめる。

そして、送った方に

喜んでいただけると

ころでしょうか…。

私はそう思って、

これからも続けていきます。



すみれ会

○代表者 岩本敏子

○グループ員数 十名

○例会 月一回 第三水曜日

平成二十五年度から、生涯学習講座に入れていただき、少人数で楽しんでいます。

会場は二十六年
度から、作東公民館で
開催しています。

下手がいい、下手
でいいと、みんな、楽
しく学習しています。



いぶしの会

○講師 権田直良

○会員数 十名

○学習日 第二、第四土曜日 午後一時～四時まで

私たち「いぶしの会」は発足してから今年の四月で四年を迎えました。J A勝英作東支店の大会議室をお借りして権田先生のご指導の下に、それぞれ個性的な絵を描きながら勉強しています。

先生からは油彩、
水彩、デッサンにも
個々の会員の良いと
ころを見つけていた
だけるのがうれしく、
また、仲間同士、批評
し合ったりと絵を描
く楽しさを味わって
います。年に、二、三
回は写生に外に向
きます。



盆栽

- 只今、会員募集中
- 特典 入会時、老鴉柿コイヤ（樹齢十年生）進呈
- 研修会 大観展（京都）
- 講習会 姫路白鷺園主（美作）

ひと鉢の盆栽、

春の萌木、夏の青葉、秋の紅葉、冬の落葉の木姿、四季のうつろいを愛でながら暮らしてください。



ひまわりの会

- 指導・代表者 中田敏甫
- グループ員数 九名
- 例会 月二回 原則として第二、第四土曜日
午後三時より 作東中央公民館

なごやかな雰囲気の中で、嵯峨御流の伝統的な花、今の生活様式に合った現代的なお花：まずは基本に忠実にと花を楽しんでいます。

少々高齢化して年二回の文化展での作品展示も花器が重く感じられるようになりました。

くらしの中に花のある生活をしてみませんか。



茶の湯同好会

- 代表者 谷本津多江
- 人数 十名
- 例会 月四回 第二、第四、木曜日、金曜日
作東公民館

茶の湯を行うため、和の心を養い、四季折々の変化を味わいながら、けいこを重ねております。皆様とご一緒にお茶を楽しみたいです。



英北短歌会

- 代表者 横山猛
- 指導者 関内惇
- 会員数 二十五名
- 例会 月一回 第二木曜日
発足は昭和五十七年。作東外からの加入者は現在十名。

現代歌人の作品を鑑賞したり文法詠（助詞の使い方）にも励むと共に、自作二首の相互批評や指導者の添削を受けています。尚、大会への投稿や研究会への参加も積極的に行っています。



能登香短歌会

- 指導者 関内 惇
- 会員数 十四名
- 講座 月一回 原則として第四金曜日
粟井教育集会所

会員は全員粟井地区の住人なので親しくて和やかに受講しています。

先生は褒め上手で、みんな楽しく過ごしています。

高齢化で人数が減少していますので初心者の加入を希望しています。



吉野短歌会

- 代表者 新免三代
- 指導者 関内 惇
- 会員数 十三名
- 例会 月一回 第一水曜日

発足は平成六年。自作二首の相互批評や指導者の添削を受けています。

また、文法詠(助詞の使い方)にも挑戦すると共に、現代歌人の作品を鑑賞しながら表現力を高めることに努めています。(おかげで受賞者続出)



山家川俳句会

- 代表者 山本 登山
- グループ員数 十六名
- 例会 月一回 最終土曜日

句風は様々ですが、有季定型を基本として作句しています。

句会では投稿句を互選し、それぞれの句への思いを自由に発表しています。句のできた背景、その句への質問、自句の解説などが、その内容です。

まともは、春名はるをさんしてもらっています。



作東川柳同好会

- 代表者 原 洋一
- グループ員数 十五名
- 例会 偶数月 第二水曜日

平成十年に、旧作東町出身の岡田千茶先生(岡山市在住)のご指導により発足した本グループは、約十年の研鑽を経て、独立し、現在は、グループ員相互の勉強会に発展しています。

毎月、課題句三句と自由句(雑詠)二句を提出し、代表者の添削を受け、さらに、偶数月には例会を開催し、和気あいあい、会員相互の親睦と新聞投稿に励んでいます。



歴史地名研究会

- 事務局 新田 祐之
- 指導者 決めず会員全員指導者
- 会員数 二十名
- 開催日 月一回 原則第四火曜日
作東中央公民館

歴史に興味のある人たちが集まり、地名によって地域の歴史を学ぶことを目的に、既にあった歴史同好会の名称を改称し、平成十七年より発足しました。学習の形態は、その都度、テーマによって会員の中からリーダーを選出し、出席者全員で意見を出し合い、和気あいあいの学習を行っています。



古文書を読む会

- 代表者 真野 みよ子
- 指導者 安東 靖雄
- 会員数 七名
- 例会 月一回 第三金曜日
平成七年の世話係、小林良矣先生からの定例案内のハガキが見つかり、発足以来二十年は経過しています。三年ほど前は午前の部、午後の部と会員数も三十人を超えていました。

現在は少人数ですが、先生のご指導のお陰で、会員は「読むこと大好き」…に成長しています。今はチーム分けをし、資料づくり、解説を進めています。仲間になりませんか。



写真同好会「写友」

- 代表者 小坂田 貢
- 旧作東町文化協会発足以来の活動で、写真同好会「写友」を結成して三十六年になります。年二回の野外撮影、例会等で制作活動を行っています。

作品の発表は、市内のみに限らず、他の公募にも出品して実績を上げて来ました。

深山から流れを集めての溪流、新緑や紅葉の木々の季節の変化等、自然の中の「二期一会」の出会いを大切に制作活動を楽しんでいます。



琴伝流 大正琴「あずさの会」

- 指導者 琴伝流大正琴中国本部 部長 藤谷 守
- 人数 十名
- 講座実施日 毎月第三木曜日午前
JA勝英本店

大正琴が大好きで、楽しく演奏するために、中国本部長の藤谷先生に指導の仕方、演奏の仕方、それぞれのグループの和の進め方等、いろいろ学習している指導者のグループです。県大会、地区大会、ポランティア活動にといろいろな所で演奏もしています。

若い人のご加入を希望しています。



舞の会

○代表者 石川 八千代
○代理 渡 辺 寛 子

舞の会には、日本舞踊（藤間流）、剣詩舞（菊水流、早測流）が所属しています。菊水流、早測流の剣詩舞関係は県予選、中国地区予選も良い成績をとっています。

小学一年生から八十歳を過ぎる人達が筋肉の運動も兼ねて頑張っているグループです。

できれば新しい空気をに入れていただければ嬉しいです。お待ちしております。



作東吟詠愛好会

平成二年当時、旧作東町には「紫洲流」と「国風流」の詩吟の流派があり、それぞれに活動をしていましたが、旧作東町文化協会芸能部長の（故）香山勇作氏が「一度、詩吟が好きなた者が集まって、発表会を開催したらどうか」と呼びかけられたのが発端となり、「作東吟詠愛好会」が発足いたしました。

「詩吟は難しい」とよく言われますが、そんなに難しいものでもありません。一つ詩を覚えれば他のものは殆ど同じ節なので誰にでもできます。

詩吟に興味のある方は、いつでも、どの教室でもお申し込みください。お待ちしております。



コーラス作東

○指導者 池 田 直 美

○会員数 二十一名（男一名・女二十名）

○練習日 月二回 第一、第三金曜日 七時三十分

作東公民館

○発表体験 岡山県婦人コーラス発表会十九回・作東芸能発表会九回・美作市芸能発表会四回の出場をしています。

○継続は力なり！

発足してから二十九年になりますが、半数の者が初代からの会員です。

○私たちの仲間になりますか？

歌が大好きな方、おしゃべりの大好きな方、どなたでもすぐ歌えるようになります。お友だちになれます。大勢の入会をお待ちしています。



江見ちぎり絵教室

○指導者 杉 本 幸 子

○受講生 七名

○開催日 毎月第一土曜日

会員が少人数なので、毎月の講習日を皆さん楽しみにしています。

また、年一回、福山教室との合同で講習会もあり、地区外の作品研修も行っています。



福山ちぎり絵教室

○指導者 杉本幸子

福山ちぎり絵教室は、会員六名で、毎月第二日曜日午前九時三十分より二時間程度、福山多目的集会所で先生のご指導を受けながら、楽しい教室です。

春、秋の文化展には日頃の作品の成果を展示しております。

また、年二回、江見ちぎり絵教室と交流会を行い、研修旅行にも行っております。



がんびの会

○代表者 名部竹夫

和紙の材料となる、楮、三椏と並んで、山に自生する「がんび」という木の皮が最高級とされ、かつて昔は「がんび引き」と言って、これを山に入って採集するのを職業としていた人があったほど、貴重な資源でした。

今では各地に和紙の工房があり、ちぎり絵はこの和紙を貼り合わせ、作品を制作するので、この和紙の原点であるがんびの木に感謝の気持ちをおこめて、「がんびの会」といたしました。



双山囲碁クラブ

○代表者 横山廣志

○会員数 一三〇名(作東三十名)

○活動

こども囲碁教室 二十三名 毎月三回

囲碁大会 作東老人福祉センター 三回

環境改善センター 二回

関西棋院か

らプロ棋士

三名を招聘

して、年一

回、対局し

ます。

囲碁サロン「天元」

林野公民館

月曜日～土曜日

(午後一時～六時)



お達者ねっと倶楽部

○会員数 九名

○開催日 毎月第一火曜日 十三時三十分～

勝田支所パソコンルーム

第三火曜日 十三時三十分～

粟井地区センター

○<http://ggbbdaa.jp/>

生活環境のデジタル化が進み、ネットやパソコンは使って当たり前の時代になりました。ウェブサイトの運用を通じて利用活性化と交流を進めながらパソコンやインターネットを誰もが気軽に楽しく使えるものになりたいと思っています。時代の進化についていくのはたいへんですが、便利に使って文化的な生活向上をめざします。



平成25年度 作東文化協会事業報告

【全体事業】

年	月	日	事業名	内容
25	3	23	作東文化協会総会	作東バレンタインプラザ
	4	26	第1回理事会	事業計画・会員募集・研修旅行・文化誌編集委員会について
	5	1	文化誌編集委員会	編集委員長選任・編集方針について
	5	24	第2回理事会	研修旅行・文化誌原稿募集・秋の文化展について
	5		会員募集開始	会員募集
	7	14	研修旅行	鳥取砂の美術館・香住・大乘寺
	10	4	第3回理事会	秋の文化展について
	10	19	秋の文化展	B & G 海洋センター(～20日)
	11	1	編集委員会	「作東の文化」第40号記念号の編集について
26	1	24	第4回理事会	春の文化展・芸能発表会・総会について
	3	7	第5回理事会	総会について
	3	22	春の文化展	B & G 海洋センター・作東農村環境改善センター・作東バレンタインプラザ 芸能発表会・H26年度総会(～23日)

【支部活動】

部名	年	月	日	内容
江見・豊野支部	25	6	12	江見・豊野合同支部評議員会
				会員募集等のチラシ配布のお願い
				平成25年度の事業計画等協議
		10		支部会員へ文化誌の配布
土居支部	25	6	7	支部評議員会
		8	26	第2回評議員会
		9	12	支部研修旅行
福山支部	25	6	10	支部評議員会
		11	8	支部研修旅行(京都嵐山)
粟井支部	25	6	11	支部評議員会
		10	5	第2回支部評議員会
吉野支部	25	4	23	文化展反省会
		6	12	支部評議員会
		8	29	くま鈴作り
		9	22	第2回評議員会
	10	29		支部研修旅行(出雲大社方面)

編物・手芸教室

○講師 妹尾 さと子

原田 豊子

○会員数 愛寿大学

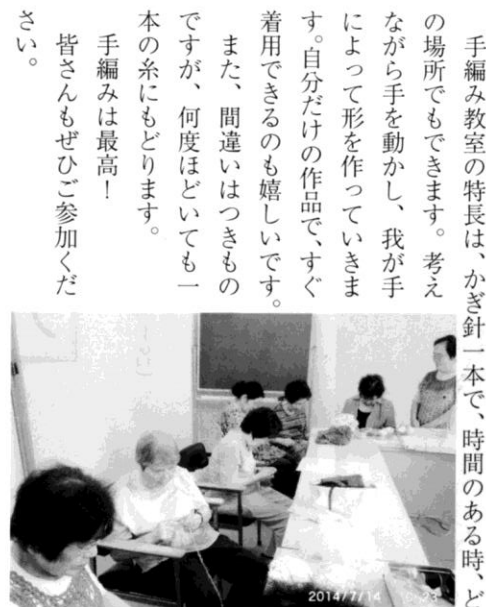
十五名

作東公民館、船曳教室 二十名

○会場 作東公民館 毎週月曜日

船曳教室 毎月第二、第四火曜日

愛寿大学 毎月第三水曜日(作東公民館)



手編み教室の特長は、かぎ針一本で、時間のある時、どの場所でもできます。考えながら手を動かし、我が手によって形を作っていくます。自分だけの作品で、すぐ着用できるのも嬉しいですが、間違いはつきものですが、何度ほども一本の糸にもどります。手編みは最高！皆さんもぜひご参加ください。

ビーズを楽しむ会

○代表者 妹尾 さと子

○講師 西坂 暁子

○会員数 十三名

○講習日 毎月一回 第二木曜日

妹尾さと子先生のご尽力ではじめたビーズ教室も、もう十年。今年は新しい会員を迎え、楽しい時間を過ごしています。



たかがビーズ、されどビーズ。小さなビーズから作品を仕上げたとき、またそれを身につけたときは嬉しいものです。作東には、手作りを楽しまう方がたくさんいらっしゃいます。私も負けないよう新しいものに挑戦してくては！

【専門部活動・1】

部名	年月日	内容
書道部	25	阿部書道会/阿部雲魚宅(月1回)
		月 作東中央公民館 2回・南海教室 A2回・B3回・C2回
		林野教室 3回・湯郷教室 2回・大原教室 1回
		書春名/高本公民館・西町コミュニティー・角南公会堂(月3回)
	9 6	白雲書道会/白雲書道会展(作東美術館)9月6日~8日
10 25	書春名/作東文化展展示 搬入出(25~27日)	
26 3	書春名/春の書画展・文化連盟展示予定	
絵画部	25	作東絵画教室/油彩画教室(月2回開催)・水彩画教室(月1回開催)
		さつき会/日本画(月2回)
		土居すみ絵/水墨(月2回)
		こぶしの会/月2回(油彩・水彩)
	3 22	さつき会/玄美会展(勝央美術文学館)
	4	こぶしの会/春の写生会2回
	5	こぶしの会/県北展出品 津山アルネ
	6 30	さつき会/倉敷市立美術館 院展
	8	こぶしの会/県展出品
	9	こぶしの会/グループ展 (JA勝英農協作東支店大会議室展示)
	9	作東絵画教室/県展出品
	10 3	土居すみ絵・作東絵画教室/作東文化協会展覧会出品
	10	作東絵画教室/しんわ美術展出品・勝山いとこみつけた展出品
	10	こぶしの会/秋の風景写生会2回・愛の美術展出品
	11	こぶしの会/秋の文化展出品
	26 1 4	さつき会/岡山天満屋 日本美術院展覧会
	2	作東絵画教室/湯郷をかく展覧会出品
2	さつき会/さつき会作品展(作東美術館 21~24日)	
3	さつき会/25年度作品展の反省会(絵画教室にて)	
3	こぶしの会/春の文化展出品	
茶華道部	25	茶の湯同好会/定例会(月4回・作東公民館)
	9 19	茶の湯同好会/お月見茶会
		ひまわりの会/定例会(月2回・作東中央公民館) 秋・春文化展出品
写真部	25 8	プラザ展示
	10 2	波賀町:福知溪谷撮影
	11 8	新庄:富撮影会
	11 22	佐用郡展応募(22~24日)
工芸部	25	むつみ会/白水・原公民館 (月2回 押絵・ちぎり絵)
		江見ちぎり絵教室/年10回開催
		福山ちぎり絵教室/年10回開催
	9 4	鳥取方面に研修旅行
	9	江見ちぎり絵教室/和紙の本社(がんばり舎での研修)
	10	江見ちぎり絵教室/秋の文化展出品
	12 7	福山ちぎり絵教室/親睦会・春秋文化展・山の学校常時展示
26 3	江見ちぎり絵教室/春の文化展出品(予定)	
芸能部	25	吉野ハビネス(岡田香真流大正琴)/月2~3回
		JAあずさの会(琴伝流大正琴)/月2~3回
		早瀬流剣詩舞道/月2~4回
		菊水流剣詩舞道/月2回
		若柳流日本舞踊/月3回
		藤間流日本舞踊/月2回
		各流派 年1~2回 作東舞の会参画・美作市連盟参画・美作市吟剣詩舞参画
		菊水流・早瀬流 全国コンクール大会参画
		コール作東/月2回
		作東吟詠愛好会/月2回
		第1回芸能部役員会
	第2回芸能部役員会	
	第3回芸能部役員会	
	第8回作東文化協会芸能発表会	

【専門部活動・2】

部名	年月日	内容
情報映像部	25	毎月第1火曜日 13時30分(勝田支所パソコンルーム) インターネット講座 6月4日、7月2日、7月4日、8月6日、9月3日、10月1日 11月5日、12月3日、H26年1月7日、2月4日
		毎月第3火曜日 13時30分~15時30分(粟井地区センター) パソコン講座 4月2日、5月7日、6月18日、7月16日、8月20日、9月17日 10月15日、11月19日、H26年1月21日、2月18日
		他ホームページ更新
	25	歴史地名研究会/定例会開催(原則第4火曜日開催)
		古文書を読む会/毎月1回(作東総合支所会議室)
歴史部	25	作東川柳同好会/偶数月第2水曜日例会・新聞発表
		山家川俳句会/各月の最終土曜日・定例会
	4 11	第2回文芸愛の小径短歌大会(美作市全体) 月1回発表:山陽新聞に投稿(英北短歌会・能登香短歌会・吉野短歌会)
		英北短歌会/定例詠草会 月1回
		能登香短歌会/定例詠草会 原則第4金曜日
		吉野短歌会/定例詠草会 月1回
	10月と3月	プラザ展示
園芸部	25 4	春 技術講習会(講師:白鷺園主指導)湯郷文化センター
		秋 技術講習会(講師:白鷺園主指導)
		先進地見学(京都大観展) 先進地見学(彦根益梅展)
手芸部	25 4	手編み教室(月4回開催・作東公民館)
		ビーズ教室(月1回開催・作東公民館) 切り紙教室(月2回開催・妹尾さと子宅)
棋道部	25 4 21	第120回双山囲碁大会 関西棋院 高橋 功 6段 荒木まこ 女流3段 プロ棋士対局 参加者:46名
	9 1	第121回双山囲碁大会 参加者:41名
	26 1 19	第122回双山囲碁大会 参加者:41名
		その他 通年事業 子供囲碁教室 囲碁サロン「天元」

【連盟事業】

年月日	事業名	会場
25 6 16	第6回美作市文化連盟芸能発表会	かつた市民センター
10 4	美作市文化連盟文化祭実行委員会(1回目)	作東総合支所 ※作東文化協会は、第3回理事会出席のため実行委員会は欠席。
11 10	美作市吟剣詩舞道連盟発表会	かつた市民センター
26 2 6	美作市文化連盟文化祭実行委員会(2回目)	作東総合支所
3 22	美作市文化連盟文化祭第4回作品展	B&G海洋センター・作東農村環境改善センター・作東バレンタインプラザ
23		

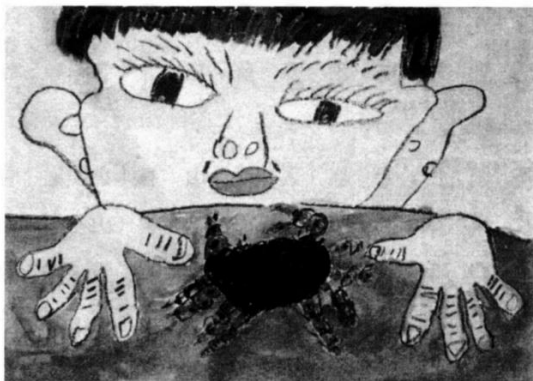
編集後記

昨年より、発刊四十周年記念号として準備してきました『作東の文化』誌を多くの方々のご協力とご支援の下、発刊することができましたこと、編集委員会委員一同、感謝しております。

記念号では、特別寄稿として全国的に名声の高い作家・あさのあつこさん、地元美作市で絵本作家として活躍されています安藤由貴子さん、そして、毎年寄稿いただいております、岡山市在住で川柳の選者として活躍されております岡田千茶さん（上福原出身）、また、作東地域出身で岡山県文学選奨に入選された、上福原在住の長瀬加代子さんと植野喜美枝さん（旧姓・衣笠 南海出身）に加えて、美作市発足以来、初めての寄稿となります、行政より、萩原美作市長、大川新教育長からの玉稿を賜り、また、里見明氏、横山猛氏、谷口重人氏の元会長三名からも記念号に寄せての感想等を寄稿いただき、格調の高い、充実した文化誌として刊行することができたと自負しております。

少子高齢化の近年、作東文化協会の会員も年々減少傾向が続いております。そのような中、毎号一覽表で掲載していますグループ紹介も、記念号では活動内容やグループへの勧誘、写真等を添えて半ページで紹介いたしますので、お気に入りのグループがございましたら加入いただき、協会の活性化にご協力くださいますようお願いしております。

編集委員会



土居小学校

作東の文化

第40号

平成26年10月15日発行

編 集 作東文化協会文化誌編集委員会
(美作市教育委員会 社会教育課)

編集委員 新田 祐之 梅澤 紀之 小玉 司
小林 秀雄 谷口 重人 原 洋一
真野みよ子 横山 猛
内藤 善晴 春名 貞和 妹尾美智子

発行所 作東文化協会
岡山県美作市教育委員会 社会教育課
TEL (0868) 72-2900 〒709-4292
HPアドレス <http://bunka.bo.jp>

印刷所 株式会社 廣陽本社
岡山県津山市田町22